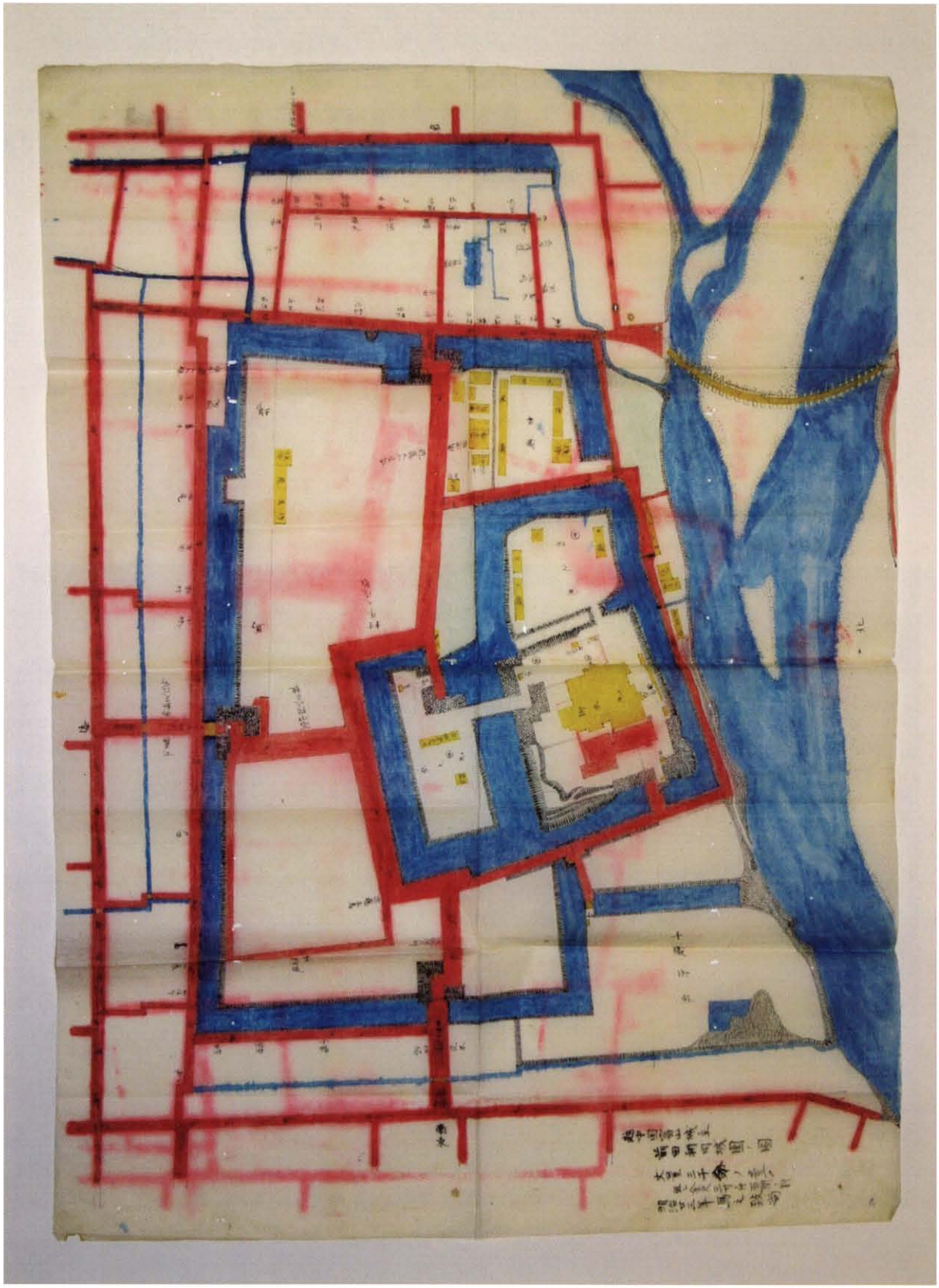
富山市埋蔵文化財調査報告24

富山城跡（とやまじょう）試掘確認調査報告書

2008

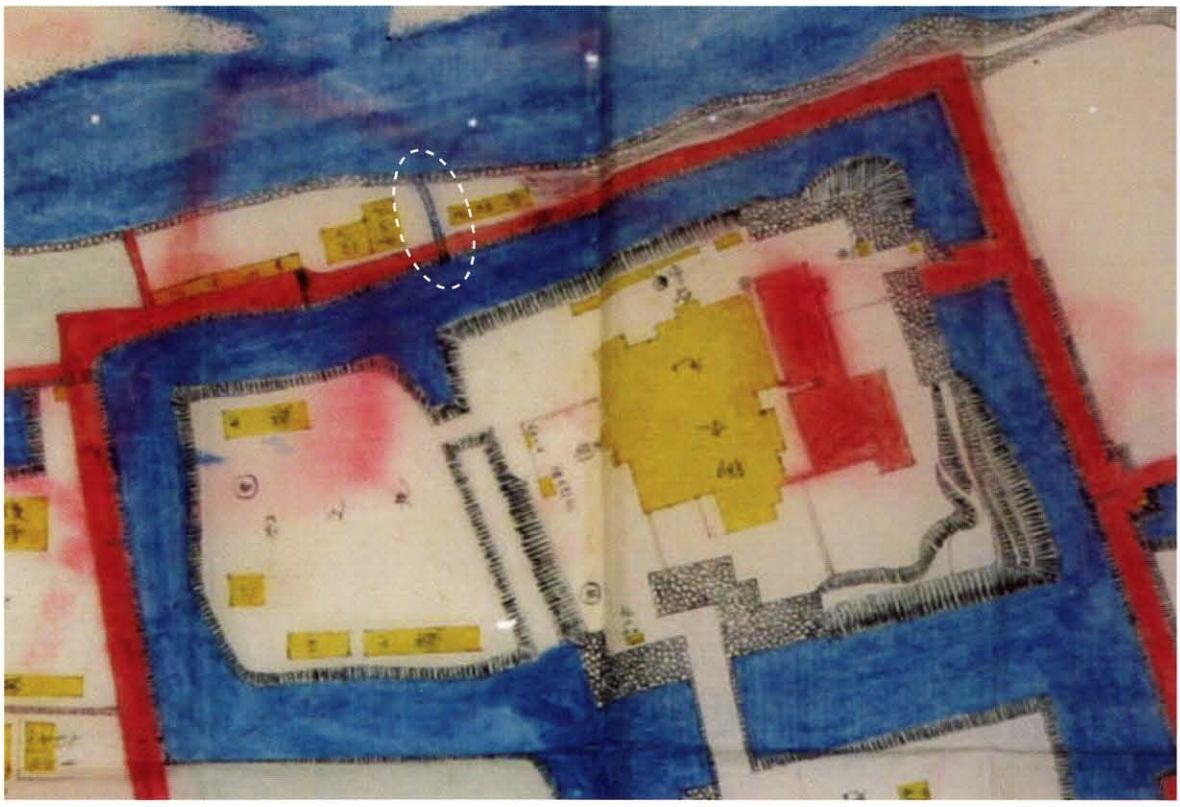
富山市教育委員会



（絵図の解説は裏面）

巻頭カラー図版　越中国城主前田利同城囲の図　富山市郷土博物館蔵

裏面の絵図は、慶応末年頃の富山城を描いたものと推定される（ページ向かって右が北）。「明治廿三年写之」とあり、明治23年の写図であることがわかる。



裏面絵図の拡大　北を上にして本丸・西の丸部分を拡大したもの。白線で囲んだところが19-4トレンチで検出した水路。

例　　言

1　本書は、富山市が予定している富山城址公園整備計画に伴う富山城跡の第５次試掘確認調査報告書である。

2　調査は、富山市教育委員会が文化庁国庫補助金及び富山県費補助金の交付を受けて実施した。

3　試掘確認調査の概要は次のとおりである。

調査期間：平成19年５月７日～平成19年６月27日

調査面積：50㎡

調査担当者：野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）、
伊集守道、長谷部真吾（以上同嘱託）

4　本書には試掘確認調査のほか、石垣レーザー測量調査の成果を記載した。石垣レーザー測量は、株式会社イビソクに委託して実施した。概要は次のとおりである。

測量期間：平成19年５月７日～平成19年５月11日

測量図校正・データ作成期間：平成19年５月14日～平成19年７月30日

測量面積：132㎡

監理・校正担当者：野垣好史、古川知明（富山市教育委員会埋蔵文化財センター主幹学芸員）

5　現地調査から報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表したい（五十音順、敬称略）。

石井　稔　浦畑奈津子　斉藤　実　佐伯哲也　坂森幹浩　宮田進一
富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山市郷土博物館　富山市公園緑地課
中村石材工業株式会社

6　調査にかかわる原図・写真類および出土遺物は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

7　本書の執筆は、伊集・長谷部の協力を得て、第４章４・５、第５章５を古川が、その他を野垣が行った。

凡　　例

1　挿図の方位は座標北、水平基準は海抜高である。

2　公共座標は日本測地系を使用した。これは城址公園内に設置された石垣改修計画用基準点を継続して使用し、全体位置座標を構築しているためである。

3　トレンチ名の標記は、「19－１トレンチ」のように、調査年度－トレンチ番号とした。

4　遺構表記は、ＳＰ：ピットを用いた。

本　文　目　次

第１章　経　　過
１．調査に至る経緯……1
２．試掘確認調査の経過……2
３．石垣レーザー測量の経過……2
４．整理作業の経過……2
第２章　遺跡の位置と環境
１．地理的環境……3
２．歴史的環境……3
第３章　試掘確認調査
１．19－1 トレンチ……5
２．19－2 トレンチ……7
３．19－3 トレンチ……7
４．19－4 トレンチ……9
５．19－5 トレンチ……9
６．出土遺物……12
第４章　石垣測量調査
１．調査の経緯と目的……15
２．三次元レーザー測量の詳細……15
３．石垣区分……17
４．測量図に基づく調査項目……17
５．各石垣面の概要……21
第５章　総　　括
１．採土跡と関連する問題……26
２．19－１トレンチの盛土と石垣……27
３．築堤について……28
４．水路について……29
５．Ｎ面石垣の測量調査の成果……31
引用・参考文献……32
写真図版
報告書抄録

第１章　経　　過

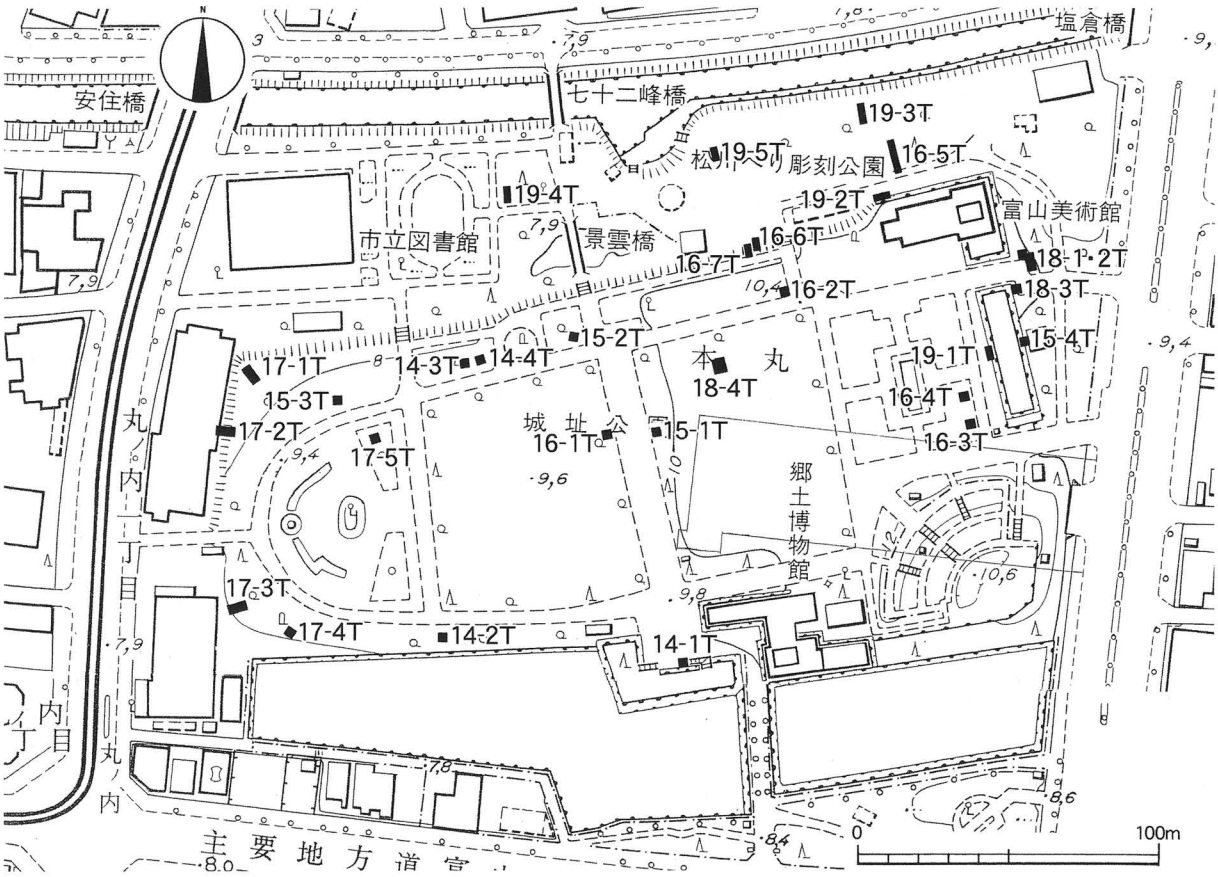
１．調査に至る経緯

富山城跡は、平成５年３月発行の『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。このときの包蔵地範囲は、現在の富山城址公園を中心とした、旧本丸・西ノ丸・二ノ丸を含む90,000㎡であったが、平成10年の文化庁通知を受けて、平成12年４月に改訂した『富山市遺跡地図』において、城下町主要部を含めた316,000㎡に範囲を拡張した。

富山城址公園は、昭和30年代にその整備がほぼ完成したが、その後、施設の多くが経年変化により老朽化し、樹木の生長等により大木が密植状態となるなど公園機能の低下が目立ちはじめた。富山市では平成10年度に「城址公園整備基本計画」を策定し、これに基づいて平成13年度に基本設計の策定がなされたが、中心市街地活性化の観点から観光拠点としての活用を図る気運が高まってきたことを踏まえ、平成16年度に基本計画の見直し・基本設計が行われた。これに基づいて平成17年度から堀や駐車場、石垣の整備などが実施され、現在も整備が進められている。

こうした整備との調整を図るため、城址公園内の埋蔵文化財の所在状況を確認する目的で平成14年度から継続して試掘確認調査を実施している。試掘確認調査は、城址公園の全域を対象に平成18年度までで計24地点行ってきた。その成果は、これまで『富山城跡試掘確認調査報告書』2004・同 2006・同2007として刊行している。試掘確認調査とともに石垣のレーザー測量調査も行い、2007年の報告書に成果を収録している。石垣レーザー測量の調査経緯の詳細については第４章１に記す。

なお、これらの調査はいずれも富山市教育委員会埋蔵文化財センターが国庫補助事業として行った。



第１図　試掘確認調査地点（1:2,500）

２．試掘確認調査の経過

試掘確認調査は平成19年５月７日に着手し、６月27日に完了した。

調査は５本の試掘トレンチを設定して掘削した。各トレンチにおける作業は、いずれも調査員立会のもと最初にバックホウによる掘削を行い、その後、作業員による人力掘削作業を行った。作業は５本のトレンチの調査を併行して実施した。人力掘削作業と併行して、随時図面作成・写真撮影を行い、調査記録を作成した。

第２図　現地説明会

調査の過程で、築堤の構築状況が判明したり、絵図に描かれた水路跡とみられる遺構が検出されたりするなどの成果が得られたため、６月16日に現地説明会を実施した。現地説明会は、現地見学と遺物展示を行い、約100名の市民の参加があった。調査記録の作成完了後、６月27日に埋戻しを行って、現地における調査を完了した。

３．石垣レーザー測量の経過

試掘確認調査で露出させた地表下の石垣測量を合わせて行うため、試掘確認調査と併行して実施した。測量箇所は３ヶ所である。測量作業は株式会社イビソクに委託した。

５月７日に基準点測量を実施し、翌８日から11日まで機器を用いた計測作業を行った。使用機械・計測方法等は第４章２に詳述した。計測した石垣画像の点群データをもとに、５月18日から富山市埋蔵文化財センターの監理担当者が、現地の石垣を観察しながら輪郭や割面・刻印等を書き入れる校正作業を行った。校正図をもとにデジタルトレースを行い、７月30日に業務を完了した。

第３図　石垣レーザー測量

なお、昨年度の平成19年3月に搦手南石垣西面で計測作業のみを行った箇所があったため、今年度の業務においてデジタルトレースまでを行った。本書にはその成果・分析を含めている。また、平成19年12月～20年３月に、搦手北石垣東面について80㎡の測量を行ったが、その結果は第４章には含めていない。

４．整理作業の経過

整理作業は、試掘確認調査終了後から平成20年３月18日まで行った。遺物整理作業は、注記・接合の確認を行った後、実測作業を行った。実測遺物の選定にあたっては、特に土器は細片が多かったため口縁部が残るものを中心にできるだけ図化するよう努めた。遺物写真撮影は主に図化遺物について行った。遺物整理作業・遺構図面整理作業・写真撮影と併行して報告書の執筆を行い、平成20年３月18日に本書を刊行した。

（野垣）

第２章　遺跡の位置と環境

１．地理的環境

富山城は富山市本丸地内に位置し、市街地の中心部にある。富山城址公園には、児童公園や芝生広場のほか、博物館・美術館が置かれ、富山市の観光地となっている。

富山県の中央に位置する富山平野は、主に神通川と常願寺川の扇状地からなる。後述するように富山城は特に神通川とのかかわりが深い。富山城から神通川を挟んで約５km 西方には呉羽山丘陵が南北に延び、県域を東西に二分している。呉羽山丘陵周辺は、旧石器時代以来の遺跡の密集地である。

神通川は、現在富山平野を南北に真っ直ぐ流れているが、江戸時代以前は富山城の西で大きく曲がり、富山城のすぐ北を大きく蛇行して東流していた。東は神通川の支流である馳川が流れ、富山城は三方を川で囲まれる要害の地にあった。富山城は、旧神通川と馳川の合流点の西にあり、神通川右岸の標高約10mの自然堤防上に立地する。江戸期における神通川の川幅は、約190mと推定されている。神通川は明治に至るまで蛇行した流路をとっていたが、洪水の被害が度々生じたため、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越工事が行われた。工事により富山城の北を流れていた旧神通川河道は廃川地となって埋め立てられ、県庁や市役所が建つ市の中心部となった。旧河道は規模を縮小して、現在松川としてその名残をとどめている。

２．歴史的環境

中世富山城　最初に城を構えたのは、放生津を本拠地とした越中守護代神保長職（「越登賀三州志」では水越勝重）と伝えられる。長職は富山以西をおさえる40余りの城塁群の頂点として富山城を位置づけた（高岡1981、佐伯1992）。その後、上杉謙信の攻略（永禄３年）、一向一揆の占拠（元亀３年）と上杉の攻略（天正元年）、神保長住の進出（天正６年）、長住の幽閉（天正10年）、佐々成政の入城（天正11年）があり、天正13（1585）年には、成政を降ろした豊臣秀吉により富山城は破却される。

神保長職による中世富山城の築城年代については諸説があるが、現在のところ久保尚文氏による天文12（1543）年説（久保1983）が有力とみられる。中世富山城の位置については、城とその城下について描いた往来物『富山之記』（山田孝雄本）の内容から、これまで富山城址公園の南の星井町以西にあったとする説と、現在の城址公園の位置にあったとする二説があった。平成14年度に行った試掘調査の結果、戦国時代後期の堀跡（薬研堀）・鍛冶工房跡、陶磁器類・茶臼などが確認され、中世富山城が現城址公園に存在していた可能性が高くなった（富山市教委2004、加藤・古川2004ほか）。

戦国後期における神通川及び支流を推定復元したものが第４図である。この時期、神通川の本流は、現在は支流の井田川であったと推定される。天正13（1585）年に豊臣秀吉が佐々成政を攻めた際に本陣とした呉羽山頂上の白鳥城や山麓の大峪城・安田城は、この流路の左岸に位置している。

近世富山城　慶長２（1597）年に富山城に入った前田利長は、翌年家督相続のため金沢に移ったが、慶長10（1605）年、隠居により再び富山城に入ることとなった。このとき大規模な改修が行われ、富山城は近世城郭として整備された。ところが、慶長14（1609）年、大火によって富山城は焼失し、その後は再建されず、元和元（1615）年、一国一城令により廃城となった。

寛永16（1639）年、富山藩10万石が成立する。初代藩主となった前田利次は廃城となっていた富山城を居城とし、幕府の許可を得て本格的な整備を行った。幕府からは、新たな天守のほか、櫓三ヵ所、櫓門三ヵ所などの新築が許可されたが、天守や櫓は建てられず、櫓門も１ヶ所にとどまった。

近代以降の富山城　明治６（1873）年に明治政府から廃城令が出され富山城は廃城となる。その後、御殿などの建物解体や堀の埋め立てが進み、本丸跡には県庁が置かれた。旧城下町も市街地化が進み、

近代富山の新たな中心地となった。昭和29（1954）年の富山産業博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に天守閣が建設された。天守閣は現在富山市郷土博物館として利用されている。　（野垣）

第4図　富山城の位置と戦国後期における城館配置（1:50,000）
（上段・平成7年国土地理院　下段・明治43年陸地測量部測図をもとに作成）

第３章　試掘確認調査

１．19－1トレンチ（第５図、図版２）

本丸搦手南石垣の西面際に設定したトレンチである。石垣の根石と地下の遺構所在状況を確認するため調査を行った。現地表面の標高は約10ｍである。説明の便宜上、下層から記載する。

地山と旧地表面　地表下2.7ｍ（標高約7.3ｍ）で黄褐色シルトの地山面が検出された。この直上に旧表土とみられる黒褐色層が厚さ25㎝ほど堆積している。この黒褐色層上面でピットが１基確認された（ＳＰ01）。ピットは直径35㎝の円形で、深さ35㎝である。中世土師器が出土したが、細片のため詳しい時期は不明である。

採土跡　黒褐色層の上に灰褐色のしまりのある層（33層）がある。この層の上面、標高約7.8ｍで細長い凹凸が確認された。これと類似した凹凸は、本トレンチの南西約20ｍの16－4トレンチで確認されている（富山市教委2006）。標高は約7.9ｍで、検出レベルもほぼ同じである。凹凸は鉄製鍬の刃先で掘り起こした採土跡と推定されている。本トレンチの凹凸は、16－４トレンチと比べると顕著でないものの、同様の採土跡と考えられる。凹凸痕から推定される刃先の幅は約18～20㎝で、これも一致する。採土面の直上では焼土や炭化物が多く認められた。16－4トレンチでも同様に確認されており、広範囲に分布していることがわかる。火災など広範囲を覆う燃焼があったと推定できる。16－４トレンチでは直上から珠洲の出土があったことから、採土の時期は、16世紀前半以前と推定された（富山市教委2006）が、本トレンチでは直上から17世紀後半とみられる唐津（第10図15）が出土した。したがって、本遺構面は17世紀後半に近い時期まで下る可能性がある。

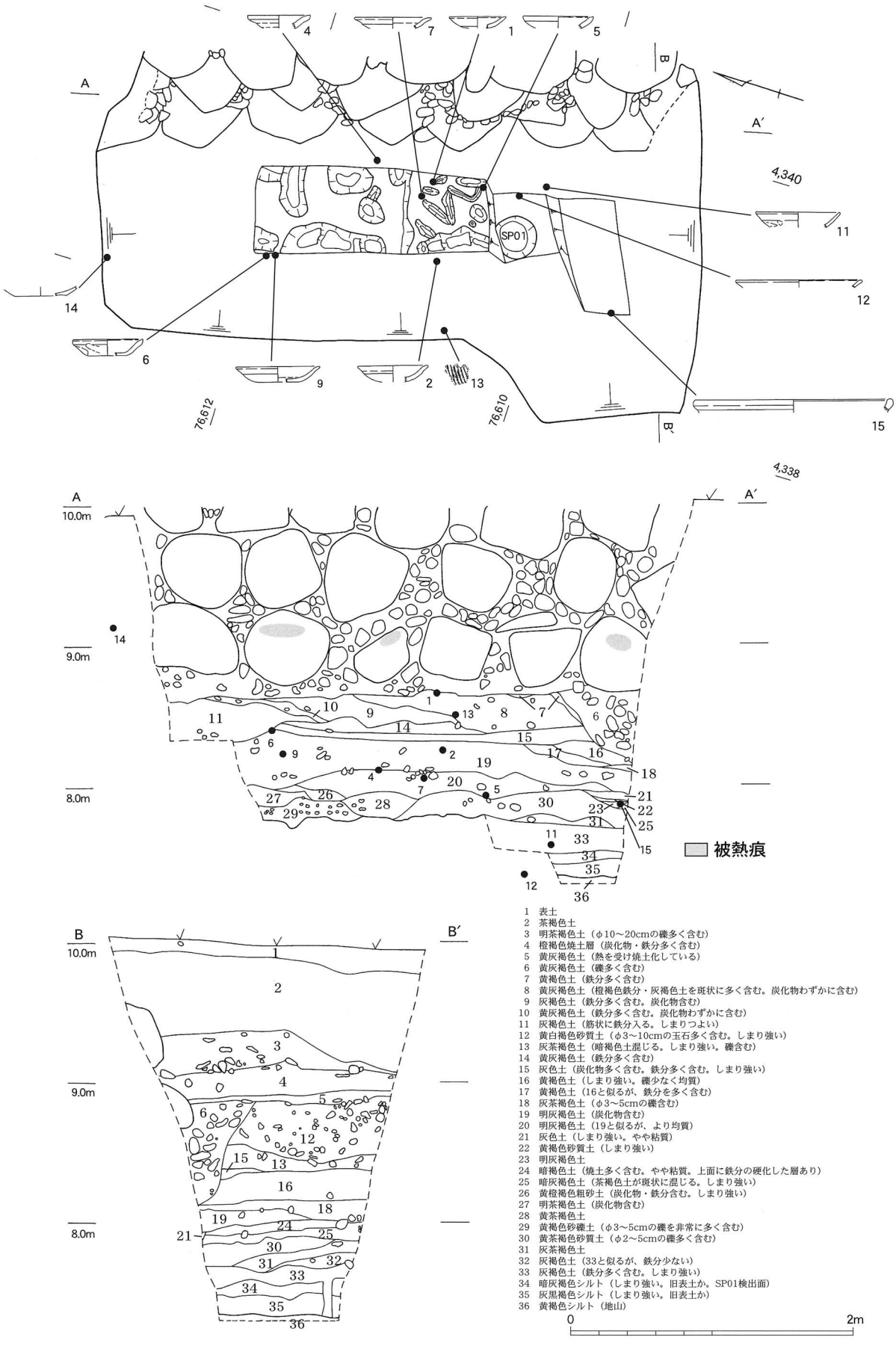
盛土（１期）　これより上層は、少なくとも２期の盛土があったと推定される。

１期の盛土は、標高約８ｍの24層までと考えられる。５～10㎝程度の薄い層が固くしまった状態で堆積する。24層の上面は焼土が多く分布していることから、ある時期の地表面であったと考えられる。この時期にも火災があった可能性がある。また、同じ24層上面には硬化した鉄分沈着層があって、洪水などにより水をかぶった可能性が考えられる。

盛土（２期）　２期の盛土は、標高約8.9ｍの12層までである。１期の盛土に比べて単位が大きい。12層は円礫を多量に含む砂質土で、しまりが強い。南壁の土層断面をみると、この層から掘り込みのあることが認められる。掘り込み内に一部の石垣根石が入り込んでいることから、少なくともこの根石については、掘り込み以降に据えられたと考えられる。12層の上面には厚さ５㎝に及ぶ焼土層（５層）が認められ、大規模な火災があったことがわかる。遺物の出土状況と記録に残る火災から推測すると、焼土層は明治32（1899）年の大火によると考えるのが最も可能性が高い。したがって、２期盛土は少なくとも明治32年以前に行われたと推定できる。

１期・２期の盛土中からはかわらけが出土しているが、城内の他の場所から持ってこられた盛土用土砂に混入していたものであろう。

石垣について　３段分が地表下に埋まっている。ほとんどの石材は加工を施さない玉石である。上述したように根石の一部が明治32年以前の盛土層を掘り込んで据えられている。したがって、少なくとも本トレンチ付近の石垣は、明治32年以前に根石から積み直されたと考えられる。また、根石の中ほどに被熱痕があることから、明治32年の大火の際、石垣は根石下半部のみが地表下に埋まり、根石の上半部は露出していた状態であったと推定できる。なお、掘り込みの覆土（６層）下層は10～20㎝の円礫を多量に含む。根石の沈み込みを防ぐ目的で掘り込み内に入れられたのであろうか。



第５図　19-1トレンチ実測図

なお、石垣は下から３段目まではほぼ水平に積まれているが、それより上部はやや乱れていて、明治32年の大火以後に再度積み直された可能性がある。

２．19－2トレンチ（第６図、図版３）

本丸搦手北石垣の北面際に設定したトレンチである。ここはもともと堀だったが、戦後埋め立てられた。地表下の石垣の状況を確かめるため掘削した。現地表面の標高は約7.6ｍである。

調査では、地表下1.6ｍで土管が出てきたため、それより下部へ掘削できなかった。出土遺物はいずれも近現代の陶磁器である。

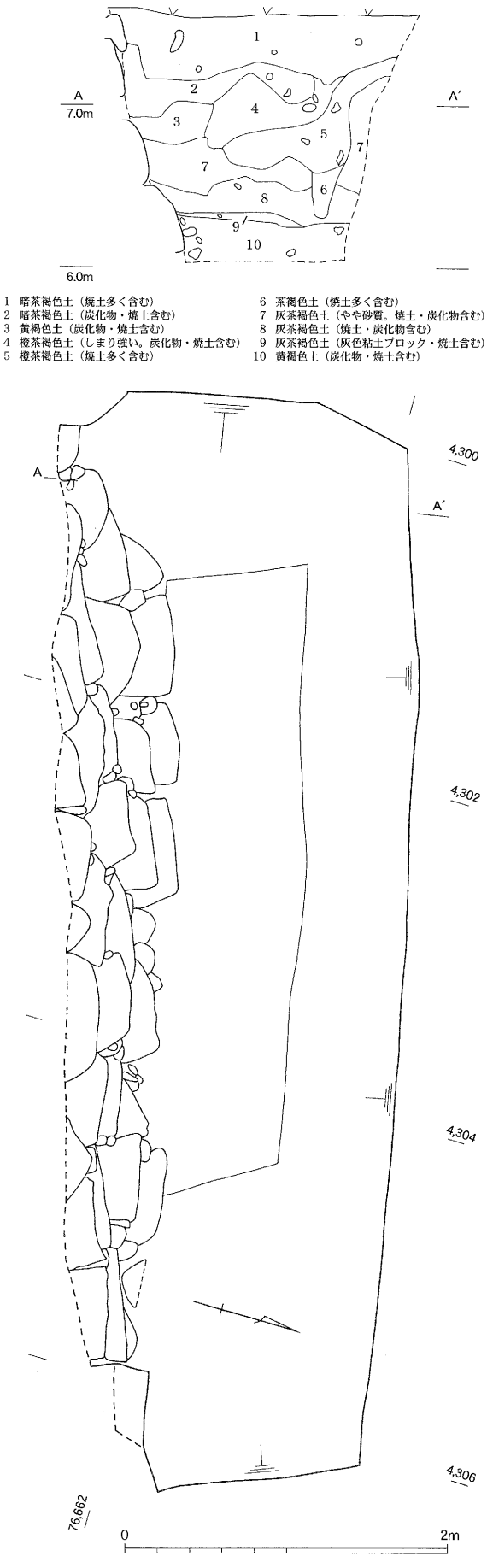
３．19－3トレンチ（第７図、図版３）

本丸北側の内堀と旧神通川の間に、東西に延びていた土手に設定したトレンチである。現在、堀は埋め立てられ、遊具が置かれた児童公園となっている。北側は明治以前は神通川が流れていたが、現在は松川がその名残をとどめる。調査は土手の構造と変遷を確かめる目的で行った。現地表面の標高は約7.35ｍである。なお、この土手は人工的に盛土されたものであるため、以下「築堤」と呼称する。

上層からみると、まず地表下20cmに円礫が水平に並ぶ面（２層）が認められる。現在の児童公園造成前の地表面とみられ、円礫は路面等に敷かれたものと考えられる。現代のものであろう。

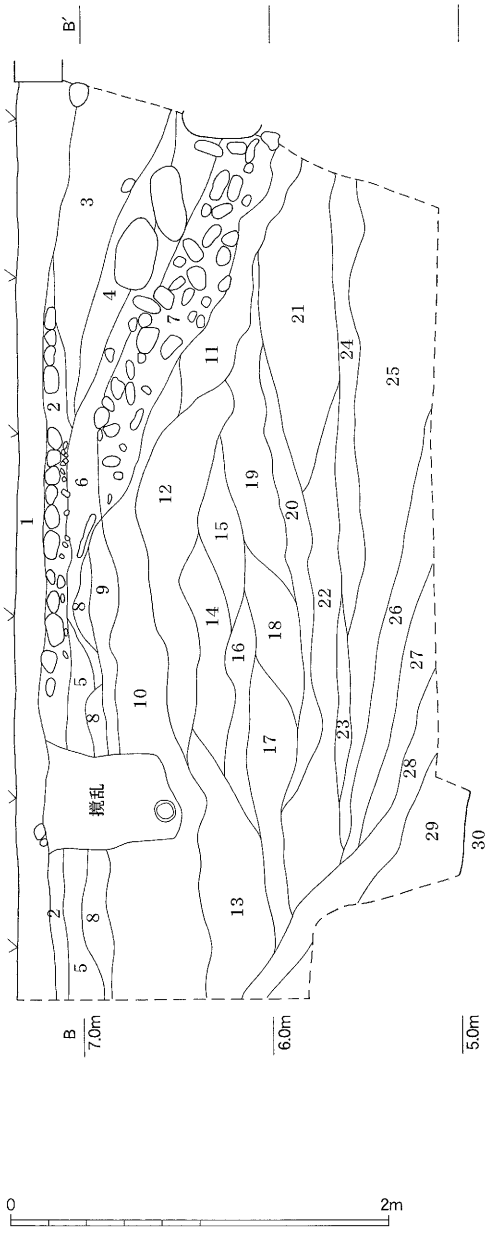
この下層で北（松川側）に向かって下る７層は円礫を多く含み、築堤斜面の護岸と考えられる。これらの層から近代とみられる陶磁器が出土しており、明治期前後の築堤斜面と考えられる。８～22層はこの築堤を構築する際の盛土であろう。築堤の斜面は、現在の斜面より約７ｍ城側（南側）に入り込んでいるため、当時は神通川が城側までせまっていたと考えられる。幕末期の絵図（巻頭カラー図版）には、神通川に下る斜面が礫で護岸してある様子が描かれ、築堤の幅がこの付近は狭く描かれていることも上記の推定と整合的である。

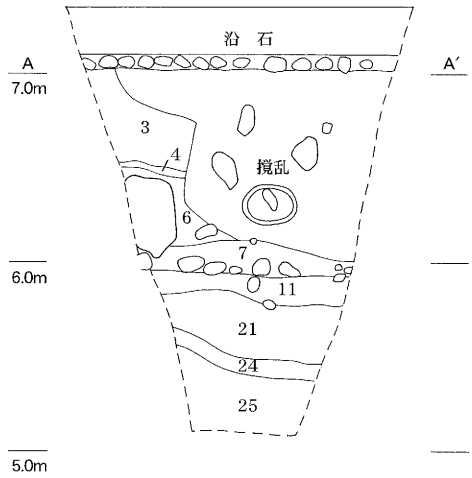
これより下は、土層から判断すると大きく23～27層、28～29層の２期の盛土に大別できると考える。時期は江戸期以前であろうが、詳細は不明である。

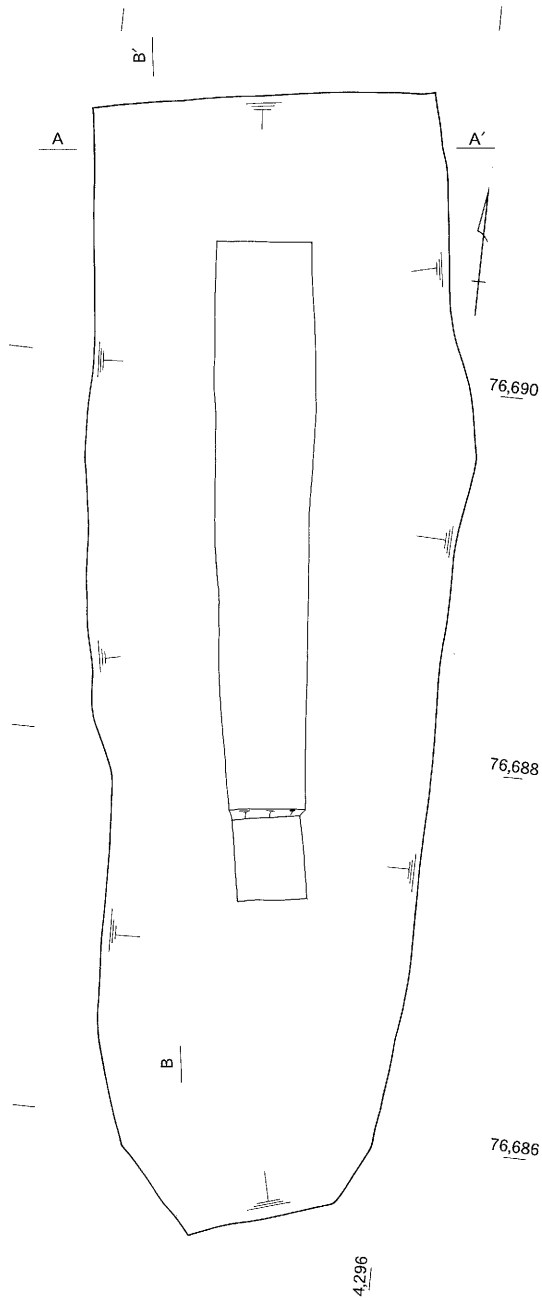


第６図　19－2 トレンチ実例図

1 表土
2 暗茶褐色土（上面にφ10～15cmの玉石並ぶ）
3 茶褐色土（炭化物多く含む）
4 灰茶褐色土（扁平な割石多く含む）
5 茶褐色土（炭化物含む。やや砂質）
6 黄茶褐色土（礫はほとんど含まない）
7 暗茶褐色土（φ5～30cmの玉石多く含む。明治期の築堤斜面か）
8 黄茶褐色砂質土（しまり強い）
9 黄茶褐色砂質土（しまり弱い。灰白砂質土混じる）
10 黄茶褐色砂質土（しまりやや強い）
11 黄茶褐色砂質土（しまりやや強い）
12 黄茶褐色砂質土（色調は10と似るが、しまり弱い）
13 黄茶褐色砂質土（10・12より白色系砂質土多く含む））
14 黄茶褐色砂質土（白色砂多く含む）
15 黄茶褐色砂質土
16 橙茶褐色砂質土（白色系砂モザイク状に含む）
17 灰茶褐色砂質土
18 明灰茶褐色砂質土
19 灰茶褐色砂質土
20 茶褐色砂質土
21 明灰褐色砂（最も砂質度合いが強い）
22 灰茶褐色砂質土
23 茶褐色砂質土
24 橙茶褐色砂質土
25 灰茶褐色砂質土
26 橙茶褐色砂質土（水分含み、ややシルト質）
27 灰茶褐色砂質土（水分含み、ややシルト質）
28 灰茶褐色シルト
29 暗茶褐色土（細かい礫含む）
30 礫層







0 2m

第７図　19-3トレンチ実測図

８～22層は、砂質でしまりが弱い。手近に利用できた川べりの土砂を用いたと考えられる。北から南に向かって盛土されている。23～27層は、黄色系土と灰色系土が交互に堆積し、上層とは積み方が明らかに異なる。より古い時期の築堤の痕跡をとどめていると考えられる。異なる土を交互に積む方法は、築堤を強固にするための造作であった可能性がある。以上の盛土が砂質土であるのに対して、28層はシルト、29層は細かい礫を含む砂礫層で、土質が異なる。盛土方法も傾斜をもたせた積み方となっていて、さらに一段階古い時期の築堤を残している可能性が高い。

トレンチ南部の底面を断割したところ、約20cm下（標高約5.0m）で礫層を検出した。北端部はピンポールで突くと、90cm下に礫層があることが確かめられ、礫層は北に向かって下がっていることがわかる。これは築堤造成前の神通川の河川堆積と考えられる。現地表面をもとにすると、築堤は基盤である礫層から約３m盛土して造られている。

なお、標高約4.9mで湧水があった。これは現在の松川水面とほぼ同じレベルである。

４．19－4トレンチ（第８図、図版４）

トレンチ設定箇所は、３トレンチと同じ、内堀と旧神通川の間に存在していた土手（築堤）部分である。位置は本丸の北西側である。調査は築堤の構造と変遷を確かめるために行った。現在は樹木が植わった公園となり、すぐ西に富山市立図書館がある。現地表面レベルは約7.4mである。

調査では、石を敷いたとみられる面が計３層確認された。便宜的に上から上層の敷石、中層の敷石、下層の敷石と呼ぶ。

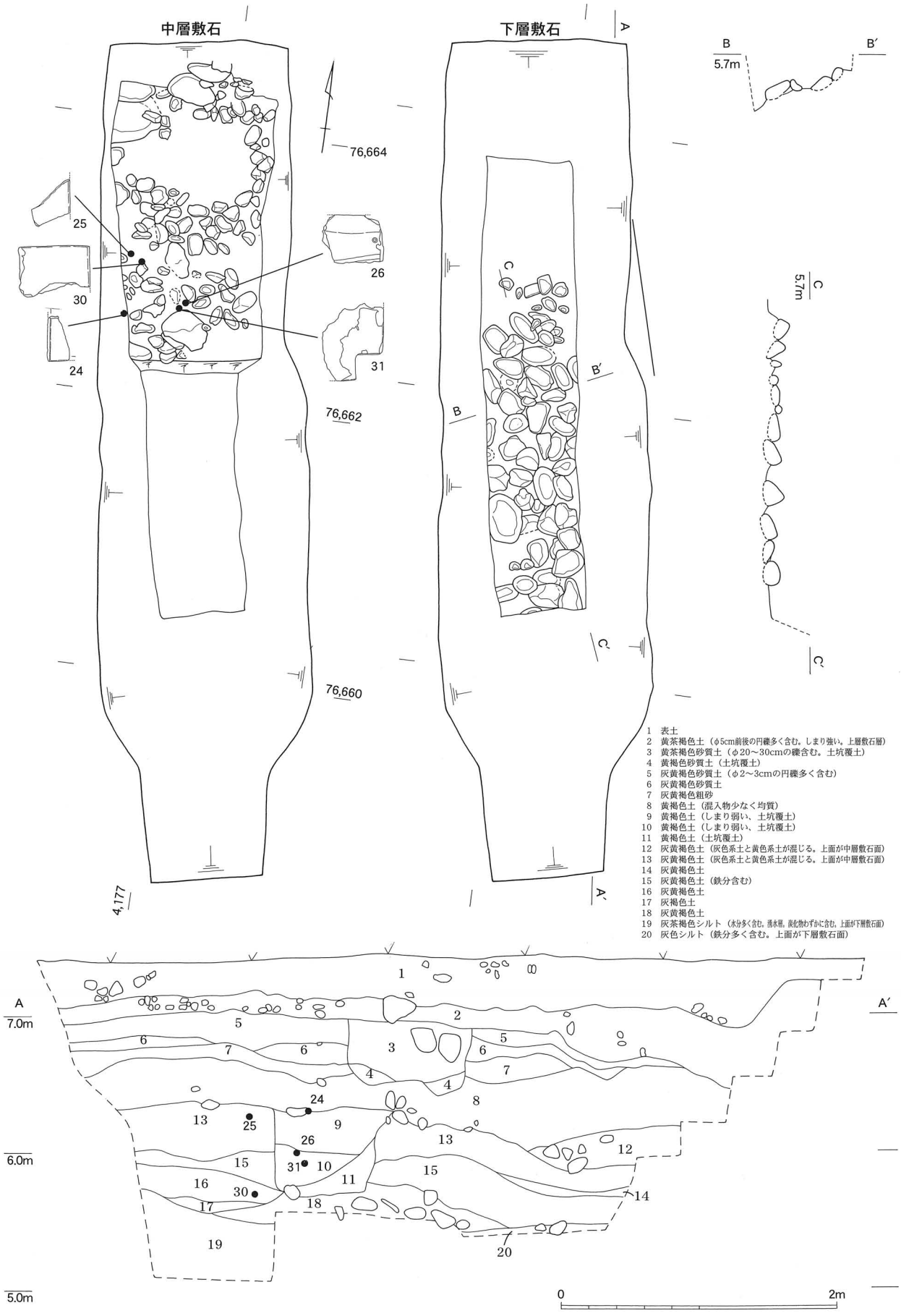
上層の敷石　上層の敷石は、重機で掘削したため断面による確認である。地表下約30cmで礫が並ぶ様子が認められた（２層）。礫は路面などの可能性が考えられたが、詳細は不明である。上層敷石の下層には、細砂粒と粘土の互層堆積(ラミナ状堆積)（６層）があり、洪水による被水した痕跡を示している。洪水後、築堤を補修した際に設置された敷石であろうか。時期は判然としないが、明治後半～戦争前後か。

中層の敷石　上層の敷石の下、約80cmで検出した。13層の上面に円礫が見られる。南半部は重機によって掘削したため、北半部のみ面的に検出した。石材は、10～30cm程度の川原石や割石を利用している。検出面の標高は約6.2～6.5mで南に向かってやや下がる。北部で長径約90cmの楕円形状に敷石の見られない箇所が認められる。また、土層断面の観察から13層から長さ90cm、深さ60cmの土坑が掘り込まれていることが認められた。13層の直上・直下から近代とみられる瓦が出土しているため、その前後の遺構と推定される。

下層の敷石　中層の敷石から約80cm下、標高5.5～5.6mで検出した。20～30cm程度の川原石が並び、約15～20°の角度で西に下がる。慶応末年（巻頭カラー図版）～明治前半頃の絵図には、本トレンチ付近に神通川と堀を結ぶ水路が描かれている。検出した敷石はこの水路に伴う護岸の一部と判断される。調査区北部で礫がみられない部分があるが、調査区北壁の土層では敷石と同じ西下がりの土層が認められた。この敷石（水路跡）については第５章４で詳しく検討する。

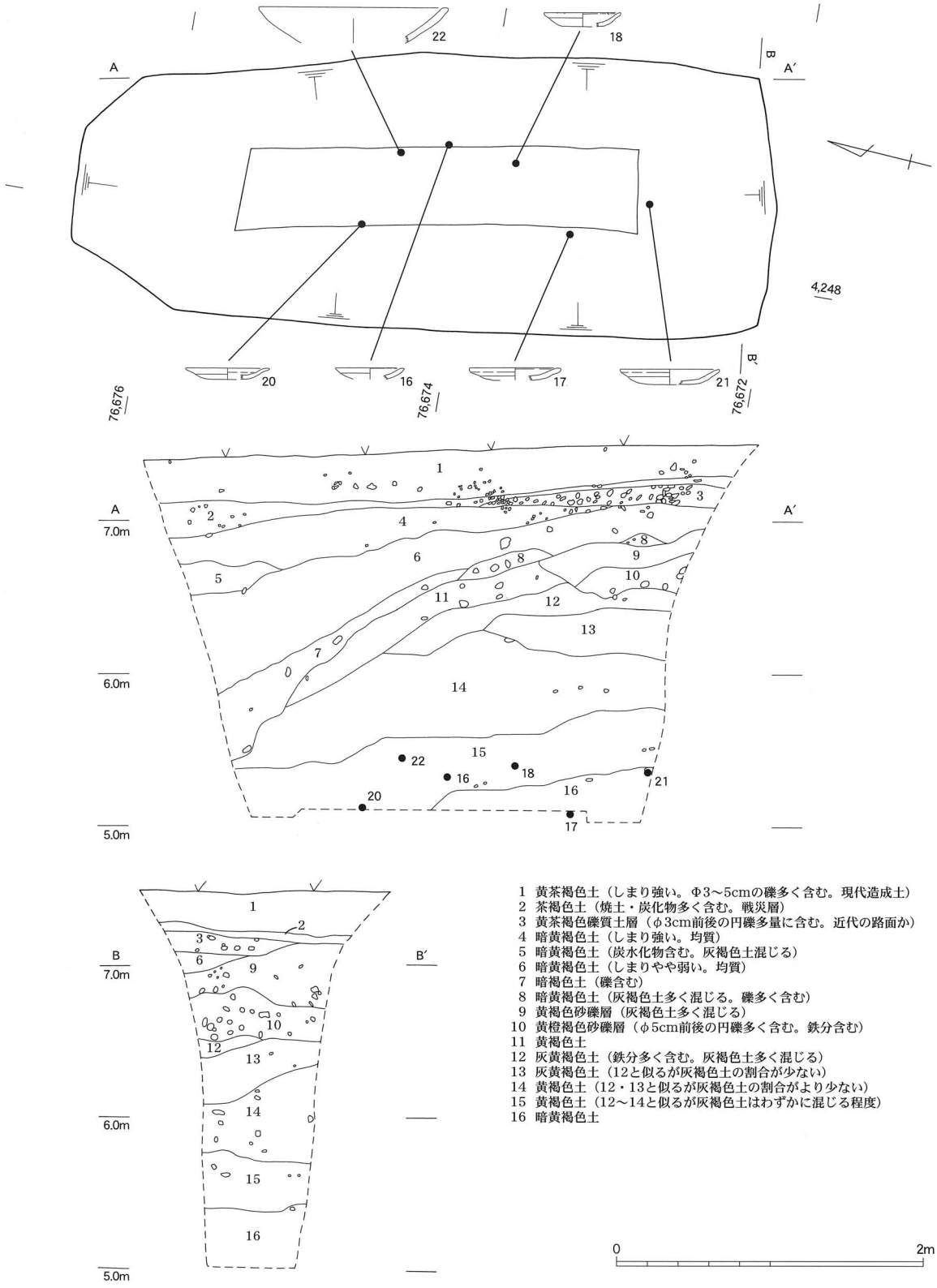
５．19－5トレンチ（第９図、図版５）

トレンチ設定箇所は、３・４トレンチと同じ、内堀と旧神通川の間に存在した築堤部である。位置は本丸の北側にあたる。調査は築堤の構造と変遷を確かめる目的で行った。堀は埋め立てられ、現在は児童公園となっている。現地表面レベルは約7.5mである。



第８図　19-4トレンチ実測図

地表下20～30cmに焼土・炭化物を多く含む２層がある。戦災層と考えられる。その下の３層は玉砂利を多く含み、近代の路面であった可能性がある。本トレンチでは地表下約2.1m(15層)まで近代ないしは現代とみられる瓦片が出土し、少なくとも近代以降に築堤が大規模に改修されたことが推定される。改修の記録などが確認できないためその契機となった出来事は不明だが、土木工事による破壊、



第９図　19-5トレンチ実測図

神通川の氾濫による決壊などの可能性が考えられる。この改修後、６層より上は再度斜めに削平されている。一方、最下層の16層は、土質では15層より上と大きな違いはみられないが、瓦片を含まず、かわらけのみが出土する。江戸期の築堤の痕跡を留めている可能性がある。

６．出土遺物（第10・11図、図版６）

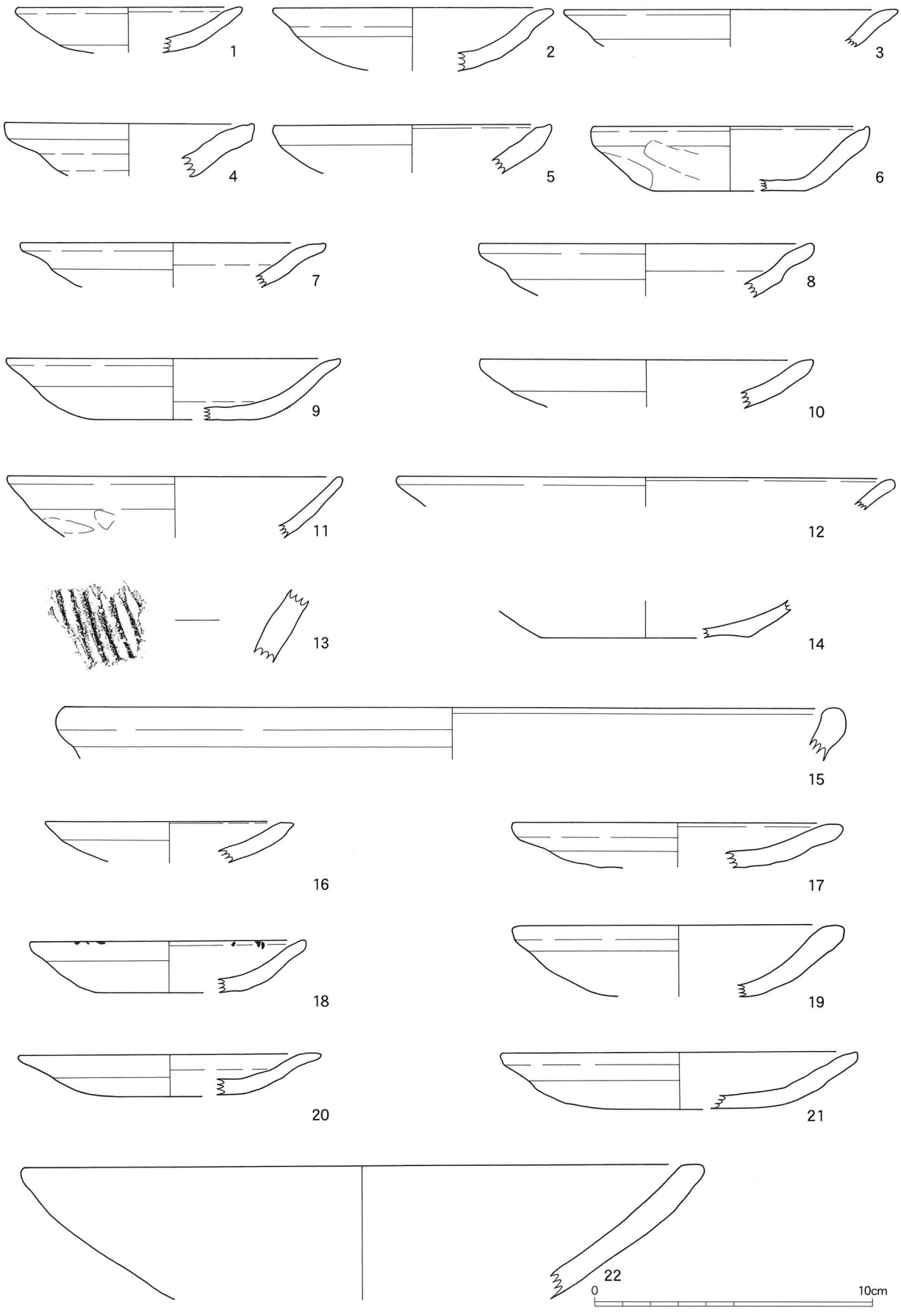
出土遺物のうち、江戸時代以前の土器・陶磁器はいずれも細片である。ほかに近代とみられる瓦がある。

19－1トレンチ　１～11はかわらけである。１は体部が内湾気味に開き、口縁端部はやや尖る。２は丸底で体部は内湾して開き、口縁部は外反する。口縁部内面は横撫で痕が明瞭に残る。色調は黒褐色を呈する。３は口縁部が外反する。４は二段撫でを施す。上段は摘み上げるように撫で、下段の撫でとの境が明瞭である。器壁は厚い。５は口縁部を強く撫で、稜が残る。端部を上に摘み上げる。６は口縁部に幅の狭い撫でを施し、その下部を指で強く押さえて成形している。底部は平底である。７・８は口縁部が強く横撫でされ外反する。８は胎土に赤色の酸化粒を含む。９は体部が内湾して開き、口縁部は外反する。胎土に赤色酸化粒を含む。10は口縁部が外反する。胎土に赤色酸化粒を含む。11は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。12は古代の土師器埦である。内面は黒色処理される。13は珠洲甕の体部片である。14は信楽の皿である。内面はにぶい黄橙色の釉がかかる。底部は内側のみを削り込んだ削り出し高台である。15は唐津の擂鉢である。口縁端部は玉縁である。口縁部内外面に鉄釉を施す。かわらけは15世紀後半～16世紀代が中心と考えられるが、11は14世紀後半～15世紀前半であろうか。15の唐津は17世紀後半に位置づけられる（家田2000）。

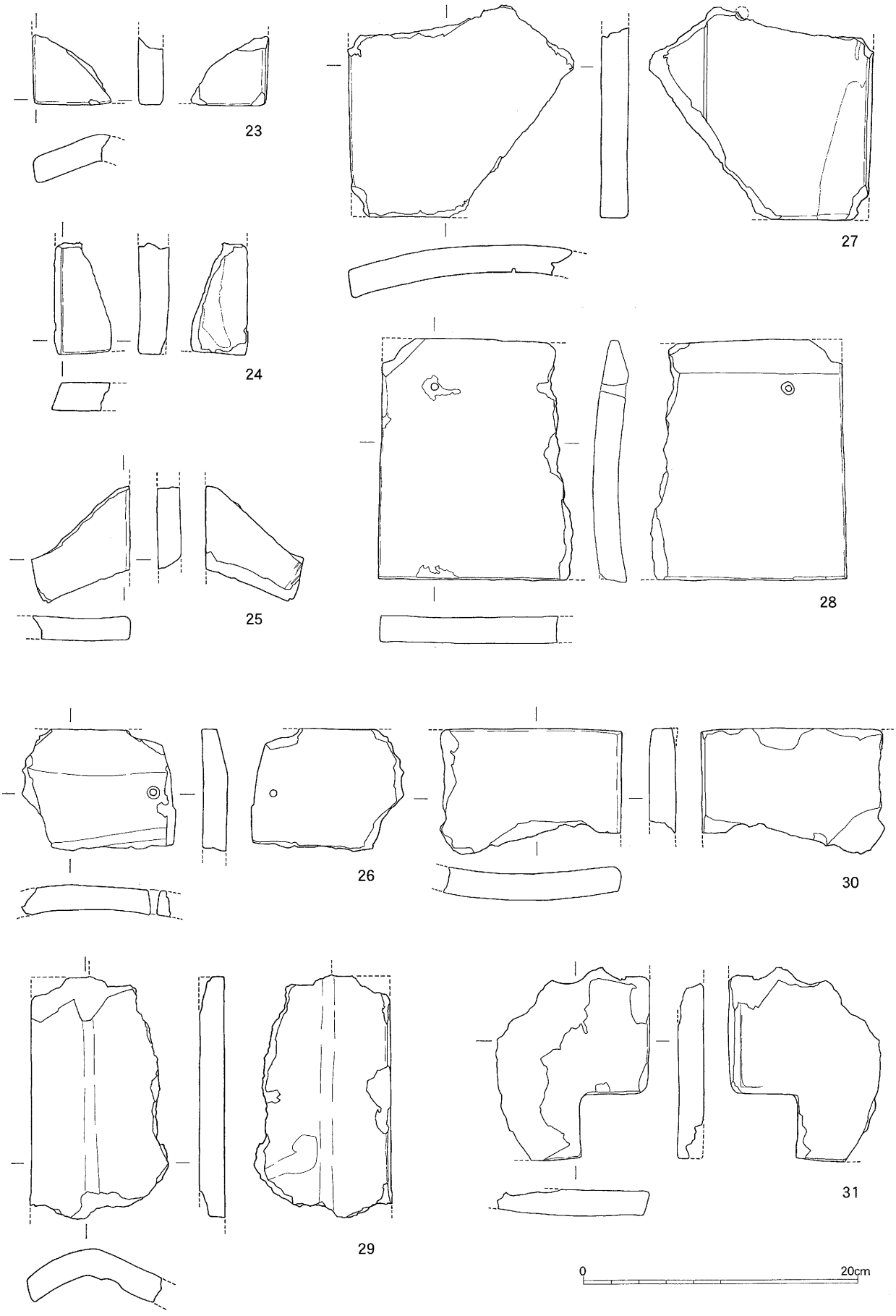
19－5トレンチ　16～21はかわらけである。16は口縁部が緩やかに内湾し、端部は尖る。17は口縁部が外反し、端部は丸い。器壁は厚く、胎土に赤色酸化粒を含む。18は体部が内湾して立ち上がり、口縁部で小さく外反する。油煙が付着する。19は口縁部が肥厚する。胎土に赤色酸化粒を多く含む。20は口縁部が外反し、器壁は薄い。21は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。22は瓦器の鉢である。かわらけは15世紀後半～16世紀代が中心と考えられる。

19－4トレンチ　主に近代とみられる瓦が出土した。瓦は、釉薬と胎土からＡ～Ｃ類の３種に分類できる。Ａ類（23～27）は、暗赤褐色の釉薬がかかる。部分的に釉がかからない箇所があるため、釉薬は掛けていたと推定される。胎土は橙色である。Ａ類は、釉薬が比較的厚く光沢のある23・24と、釉薬のかかり方にムラのある25～27に細分できる。Ｂ類（28）は、赤黒色の釉薬に黄橙色の胎土である。釉薬は最も厚くかかる。Ｃ類（29～31）は、釉薬がかからないか、ごく薄くかかる程度である。表面は橙色でほとんど露胎である。胎土は浅黄橙色である。

23は桟瓦の桟部分の頭部である。断面に湾曲がみられる。24は桟瓦あるいは熨斗瓦の頭部と考えられる。裏面に釉薬が帯状にかからない部分がある。25は平瓦あるいは桟瓦と考えられる。26は巴瓦の尻部と考えられる。端部が幅3.5cm程度斜めに削ぎ落とされる。穿孔が一箇所ある。27は熨斗瓦である。裏面に幅２㎜、深さ２㎜の筋がある。筋から2.5cm離れた位置に穿孔がある。裏面は部分的に釉薬がかからない。28は熨斗瓦である。最下部の台熨斗に相当すると考えられる。裏面の端部は幅2.5cm程度が斜めに削ぎ落とされている。左上に裏面から表面への穿孔がある。29は桟瓦の桟部分である。尻部にわずかに切り込みの痕跡が残る。30は桟瓦の尻部である。31は、桟瓦の頭部である。約4.8cm角の切り込みがある。裏面の切り込み上部にはＬ字状にわずかな段差がある。（野垣）



第10図　出土遺物（1）



第11図　出土遺物（2）

第４章　石垣測量調査

１．調査の経緯と目的

富山城石垣は、これまでの研究で、慶長10（1605）年、前田利長により初期石垣が整備され、慶長14（1609）年の大火で焼失荒廃後、富山藩が寛文元（1661）年から修築して現在に至ると考えられる。富山藩修築の際には慶長期石垣の築石を再利用するとともに、一部新石を補充して積み替えを行ったとみられる。

その後度重なる天災により、石垣は各所において崩壊・積み直しを繰り返しており、明治期に大幅な積み直しが行われ、ほぼ現在の姿になったとみられる。

現在の石垣は、不適切な近代的積み直しによる孕み出し、石垣上の樹根の肥大化による孕み出し、戦時中の焼夷弾の集中投下類焼による被害が随所に見られ、痛みが激しい。

富山市公園緑地課では石垣築石の定点観測を複数年にわたって行い、危険度判定により危険度の高い部分から積み直しを計画した。これに先立ち、石垣の文化財的保護の観点から、対象石垣を現況測量する必要が生じたため、平成14年度末から順次測量調査を開始することとした。

測量は、地上型スキャン式レーザースキャナーによる三次元計測を採用した。これは積直しの際の立体的復元に対応できる手法を検討した結果選択した測量方法である。

調査は測量成果図の作成を主目的とし、またそれに基づき、個別の石材における表面観察から、石質・刻印・石面加工などの調査を行い、結果をまとめた。ただし、これまでに行った測量調査は、模造石垣部分も含めた全体の約50％で、調査成果は途中のものである。　（野垣）

２．三次元レーザー測量の詳細

石垣測量は以下の測量内容とした。

①平成14～19年度の年度別計測方法は表１の通りである。

表１　年度別計測一覧

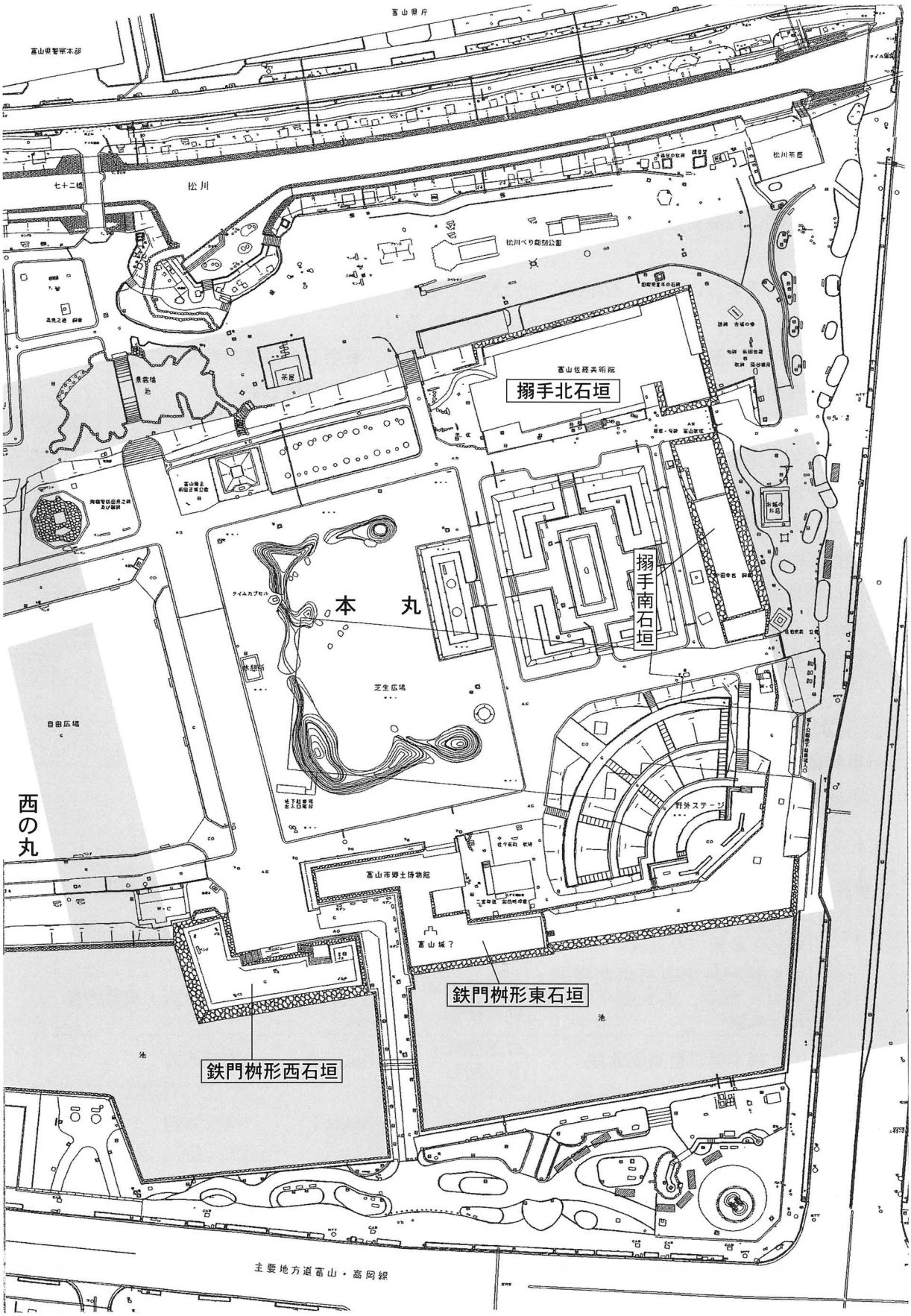
年度	計測石垣	使用三次元レーザー機器	計測ピッチ	計測方法
14	本丸鉄門枡形西石垣東端面・東面・北面（合坂面）	ＴＤＳ-130Ｌ	10mm以下	正対計測
15	本丸鉄門枡形西石垣北端面・南面・西面、本丸搦手枡形南石垣北面	ＴＤＳ-130Ｌ＋ＧＳ200	6～7mm以下	正対計測・複数方向
16	本丸搦手南石垣東面北部	ＧＳ200＋ＴＤＳ-130Ｌ	6mm以下	複数方向
18	本丸搦手南石垣東面南部・土橋面、本丸搦手外枡形東面・北面	ＧＳ200	6mm以下	複数方向
19	搦手南石垣西面中央・南合坂面、搦手北石垣北面中央、搦手外枡形石垣北面西半	ＧＳ200	6mm以下	正対計測・複数方向

②レーザー測量機器性能

以下の機器・方式によって計測を行った。

使用機器　　ニコン・トリンブルＧＳ200（2～200m長距離用）

計測方式　　タイム・オブ・フライト方式



第12図　本丸石垣位置図（1:1,200）アミは内堀

レーザー光　緑色レーザー　532ｎｍ　スポット径　3.0mm/50m

計測データ　三次元データ（X, Y, Z）　反射照度・ＲＧＢカラー

計測機器は、平成14年度計測開始当初はＴＤＳ-130Ｌを使用していたが、緑色レーザーを利用した新開発のＧＳ200が導入され、平成15年度はこれを補足的に使用した。平成16年度には技術的に実用性が確認されたため、ＧＳ200をメインに使用しＴＤＳ-130Ｌを補完的に使用した。平成18年度からはＧＳ200をメインとする計測に移行した。

使用ソフトは次の通りである。

・ソフト名：ニコン・トリンブル　ＲＷＳ　　処理内容：計測点群の合成・座標移動・面の発生

・ソフト名:アイ・エス・ピー　Geo From　　処理内容:計測点群からオルソＣＧを作成

（野垣）

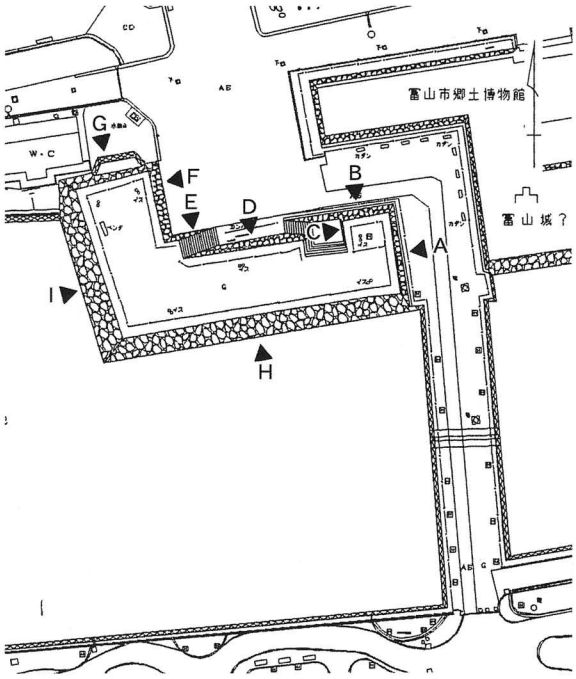
３．石垣区分

平成14年度から計測面15地点24面のレーザー測量を行った。測量延べ面積は実測で1392.3㎡である。年度毎の測量箇所及び面積は表２のとおりである。これまでの各石垣の測量成果は、便宜的にＡ～Ｍ面と呼称して報告している（富山市教委2007）。これに続けて、今年度の測量報告箇所をＭ-２～Ｏ面とする。Ｍ面は、調査年度が２ヶ年にわたったため、今年度の測量箇所をＭ-２面とした。Ｎ面については、通常の石垣面をＮ-１面、合坂間をＮ-２面、南合坂面をＮ-３面に分ける。（野垣）

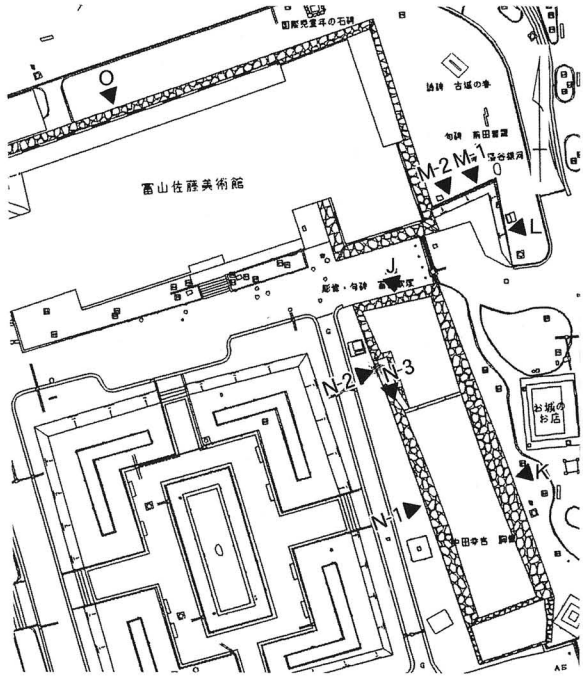
４．測量図に基づく調査項目

以下の７項目について、表面観察による概要調査を行った。測量を行った石垣面の一部は、平成19年度に富山市が行った石垣修理に伴う解体調査の成果も加味して調査成果を示した。

①石　積　富山城で採用されている石積には、布積・乱積（落積）・鏡積がある。特に鏡石の存在



鉄門桝形石垣



搦手石垣

第13図　石垣測量区分図（1:1,000）

表２　計測各石垣面の位置・面積

面	石垣名称	所在場所	実測面積
A	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　東面１（櫓台東面）	76.0㎡
B	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　北面１（櫓台北面）	60.5㎡＋雁木面10.5㎡
C	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　西面１（櫓台西面）	6.5㎡＋東相坂面6.0㎡
D	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　北面２（合坂間）	73.4㎡＋試掘部分1.1㎡
E	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　北面３（西合坂台）	21.5㎡＋西合坂面14.0㎡
F	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　東面２	51.5㎡
G	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　北端面（ハバキ面）	42.0㎡＋ハバキ面23.0㎡
H	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　南面（堀面）	315.0㎡
I	本丸鉄門枡形石垣	西石垣　西面２（堀面）	175.5㎡
J	本丸搦手石垣	南石垣　北面	58.0㎡
K	本丸搦手石垣	南石垣　東面	261㎡＋試掘部分2.8㎡
L	本丸搦手外枡形虎口	東面石垣（旧堀面）	8.5㎡＋試掘部分7.5㎡
M-1	本丸搦手外枡形虎口	北面石垣（旧堀面）　東半	6.0㎡＋試掘部分5.0㎡
M-2		北面石垣（旧堀面）　西半	2.5㎡
N-1	本丸搦手石垣	南石垣　西面	110.5㎡＋試掘部分6.5㎡
N-2		南石垣　西面（合坂間）	10.0㎡
N-3		南石垣　南合坂面	3.5㎡
O	本丸搦手石垣	北石垣　北面	25.5㎡＋試掘部分8.5㎡

する鉄門石垣通路面を中心に、横積され大面を石面とする特殊な積み方が認められる。このほか、角石や角脇石の横石に横積の石が配置される。搦手石垣においては近代における改変が著しく、また搦手南石垣西面全体は主として玉石積となっており、コンクリート補修も行われている。

②石　材　石垣築石の多くは結晶の大きな花崗岩である。次いで安山岩、石灰質砂岩の順で多く、ほかに片麻岩等がある。片麻岩等の石材は白色系統のものを中心に選択されている。調査は、花崗岩・安山岩・石灰質砂岩・その他に４区分し、肉眼表面観察により一石毎に判定した。解説の図面（第15～17図）は、安山岩・石灰質砂岩・その他の３種を作成した。したがって図示以外のものはすべて花崗岩である。

③築石種別　築石の多くは川原石の割石を使用しているが、川原石をほとんど加工せず玉石のまま築石として使用しているものがある。特に搦手南石垣西面（N面）に多い。

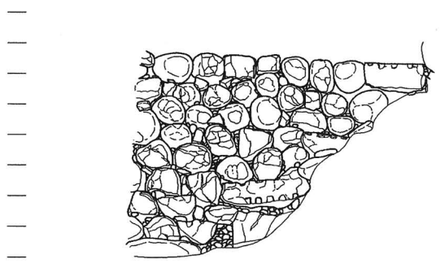
④近代新補石　明治以降に取替・追加されたとみられる玉石が、平石及びハバキ石等に使用されている。神通川産とみられる長石を多く含む安山岩系石材が主体であり、このほか安山岩、花崗岩系・片麻岩系石材がある。これらの一部には豆矢と呼ばれる小型の矢穴が認められ、識別のメルクマールとなる。また江戸期に調達された石材のうち、主として安山岩玉石を再加工（２分割）したものも存在しており、これを含めた。

⑤刻　印　石面の刻印及び表面から目視される内側の刻印を確認した。刻印には大型と小型のものがあり、小型が主体である。刻印には石面に行われるものが多いが、自然石面に残すものもある。石面の刻印は必要に応じ計測・拓本を行い、スケールをあてて一石毎にデジタル撮影した。

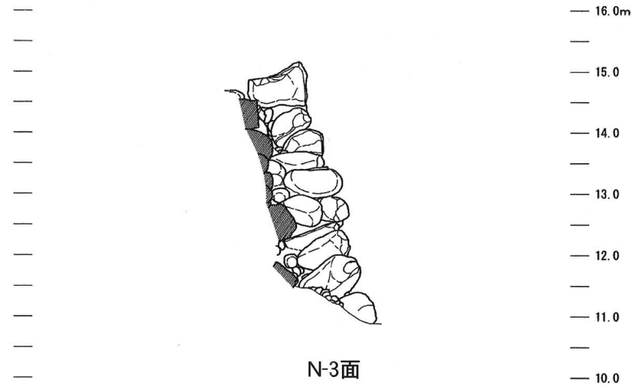
⑥修理範囲　各石垣面において縦目地や目地の変化、近代新補石などから総合的に判断される積直し痕跡を探るものである。一部石垣解体調査成果を加味して考察した部分がある。なお、天端から１、２段は近現代に積直しを行っている箇所が多い。

⑦勾　配　試掘確認調査により地中部分を露出した石垣面については勾配を確認した。

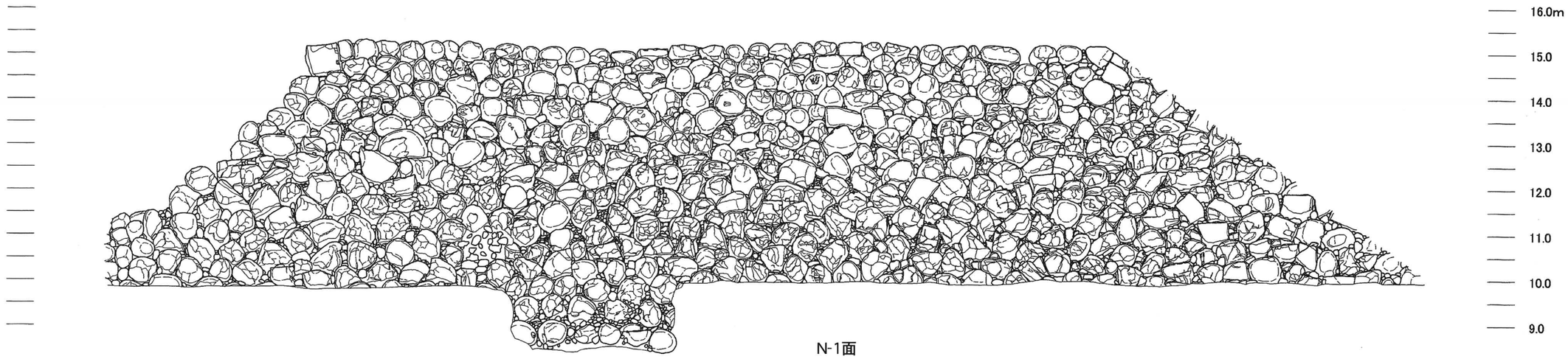
このほか、ハツリ・筋ノミによる表面整形加工、天端を中心とした特殊な割石選定などの調査も行ったが、その調査結果及び分析は別稿に譲ることとする。　（古川）



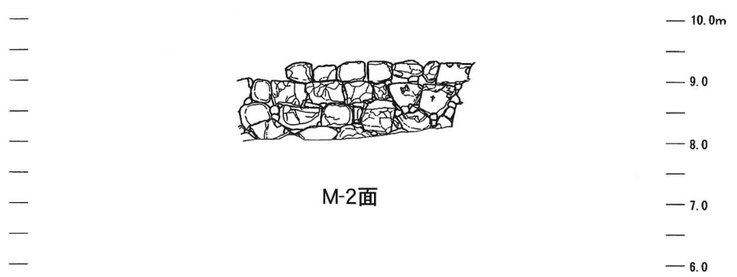
N-2面



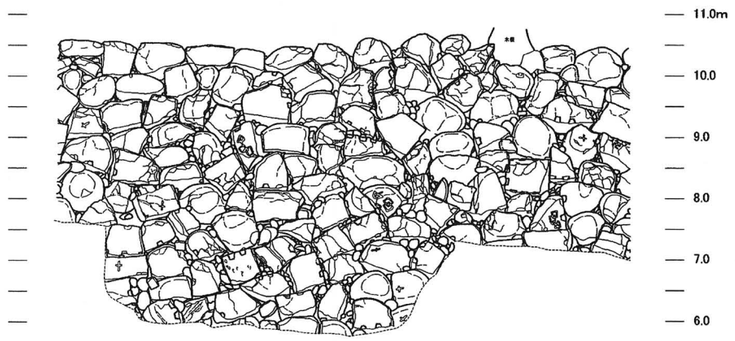
N-3面



N-1面



M-2面



O面

0 5m

第14図　石垣測量図

5．各石垣面の概要

本項では、各石垣面の測量立面図（1:100）を第14図に示し概要を解説する。また、調査項目毎に各石垣面における状況を1:200縮小図により第15～21図に示し説明する。

調査項目は次の７項目とする。①石垣の年代と石積の特徴、②石材、③築石種別、④近代新補石、⑤刻印、⑥修理、⑦勾配である。調査項目に対応する築石については、原則として黒く塗り潰して表示することとする。なお、測量調査は部分的に行っているため、調査所見については平成19年度までの周辺地の測量調査の成果を踏まえて述べることとしたい。

M面は、平成18年度に東半部の測量を行っている。本稿では今年度測量した西半部と合成した図を作成し、M面測量部分全体を検討対象とした。

Ｎ－１面においては、南北両側で平成18年度に修理工事による積み直しが行われている箇所がある。本検討にあたっては、積み直し後に測量した南側部分（Ｎ－１面右上）を除外した。北側部分（Ｎ－１・２・３の各面に分布）については積み直し以前の旧状で測量を行っている関係上、旧状を検討対象としているものである。

（１）Ｍ　面

①石垣の年代と石積の特徴　この面は、天端で東西7.6ｍを測る。左端から4.5ｍより右側は天端が１段増えている。この面の左端はＬ面に接する。隅角部は平成18年度の試掘に伴い、天端から５段分を確認した。Ｌ面（富山市教委2007）では整形された角脇石１石によるのに対し、M面の角脇石は２段になるなど乱れがみられる。その他はＬ面と特徴が似る。

地上に石面全体を露出する築石及び試掘により確認した築石は、角石５石、角脇石５石、平石48石の計58石である。

②石　材（第15図）　安山岩は８石（13.8%）、花崗岩は50石（86.2%）である。

③築石種別（第18図）　玉石が４石存在する。東半の天端に２石、西半の天端に１石、西半の４段目に１石である。いずれも安山岩である。

④近代新補石（第19図）　天端における玉石及び玉石の石面ゲンノウ割のある７石が該当する。

⑤刻　印（第20図）　小型刻印が７石、中型刻印が１石存在する。中型刻印は天端角石の小面部分に彫られ、「卄」形である。小型刻印には「⊕」「冂」「十」「卜」「⊖」「⋈」がある。

⑥修　理（第21図）　角石部分を除く天端から２段目までが近代新補石による昭和期の修理とみられる。

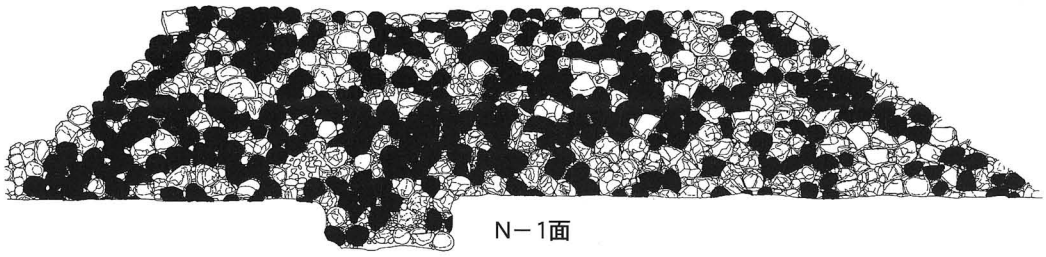
（２）Ｎ　面

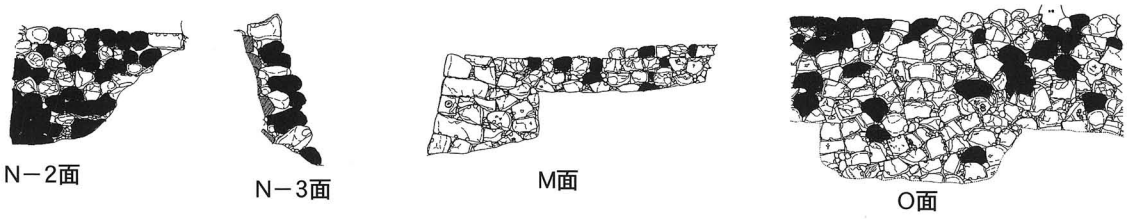
①石垣の年代と石積の特徴　本丸搦手虎口に置かれた南北石垣のうち、南石垣の西面全体をＮ面と呼称する。天端における南北長は44.3ｍを測る。

搦手虎口は、江戸期絵図と発掘調査による検証から、慶長期に喰違虎口であったものが寛文改修期に平虎口＋外枡形通路（１面石垣）となり、天明期以前に平虎口＋外枡形通路（２面石垣）に改修されたというような変遷が把握されている（富山市教委2007）。

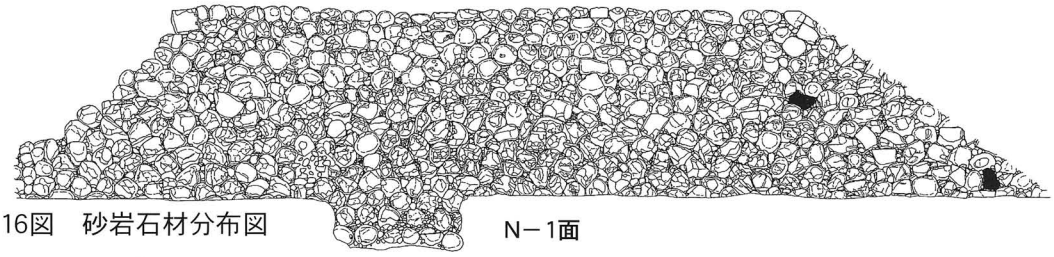
搦手南石垣は現在、虎口面（通路面）側を櫓台形態とし、その南側は1.4mほど内側に入った石垣面となる。この石垣面をＮ－２面と呼称する。Ｎ－２面の天端面の南北長は8.3ｍを測る。この面の南端は階段状の乱雑な傾斜石積となっており、絵図で示される坂（階段）の残存部のようにみえる。この面をN-３面と呼称する。天端での幅は60cm を測る。N-２面の下部１ｍほどは、N-１面レベルまで石積が行われている。

これより以南は天端面が30cm ほど高くなり、虎口面とほぼ同じ幅の石垣となる。この西面をN-１

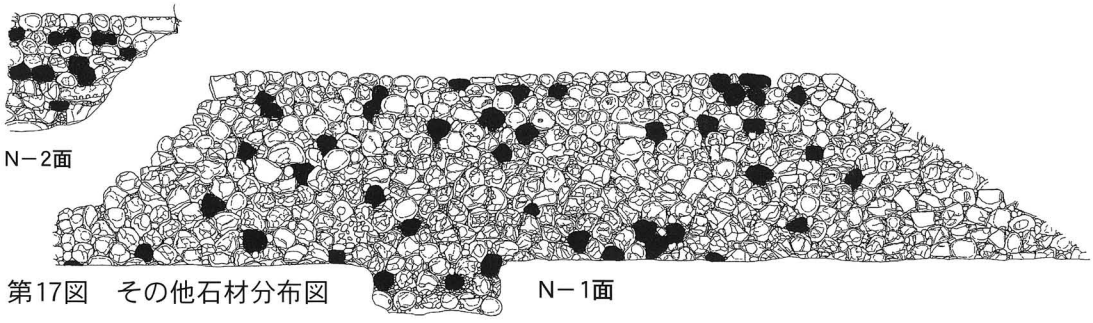




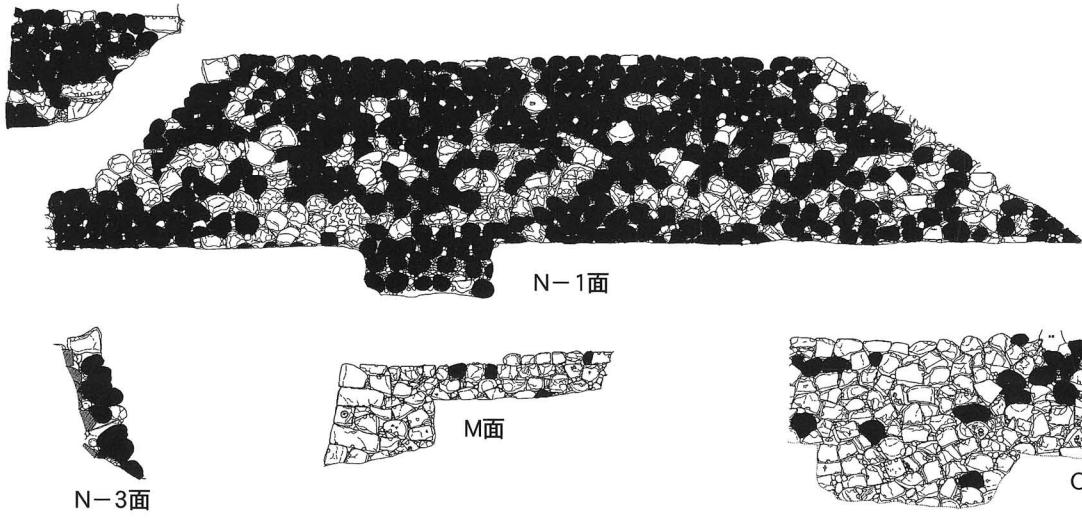
第15図　安山岩石材分布図



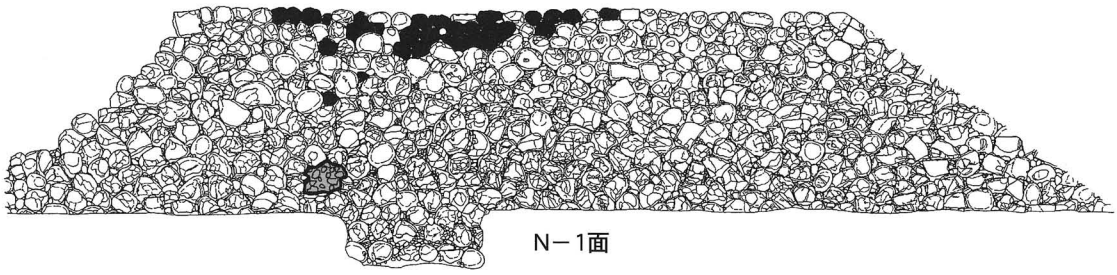
第16図　砂岩石材分布図

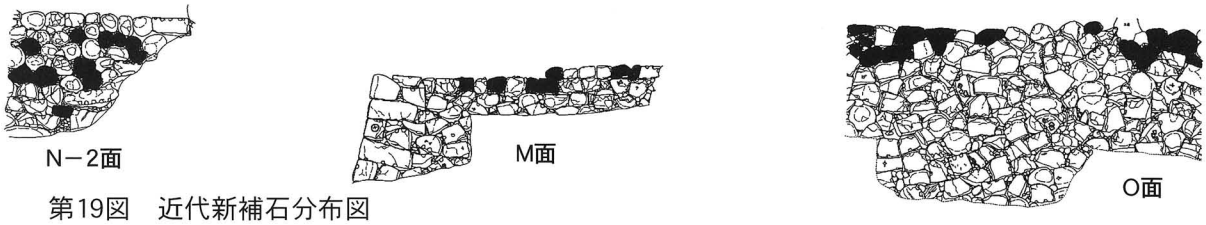


第17図　その他石材分布図

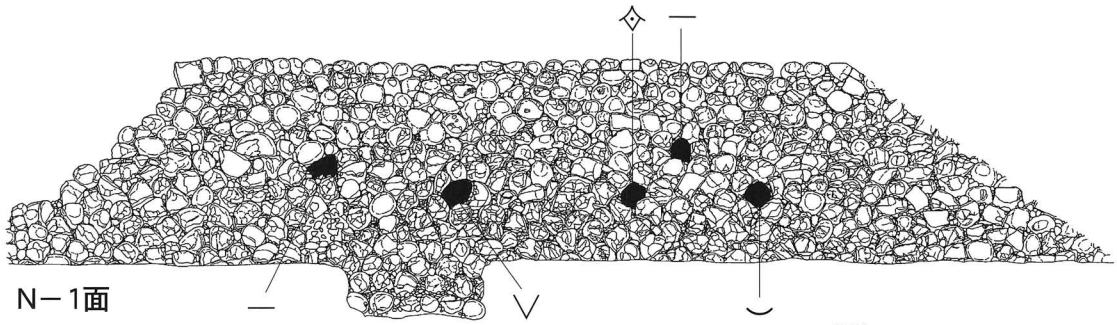


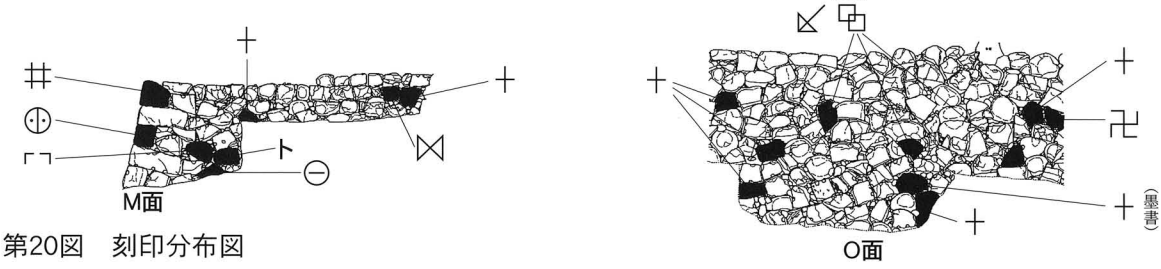
第18図　玉石分布図



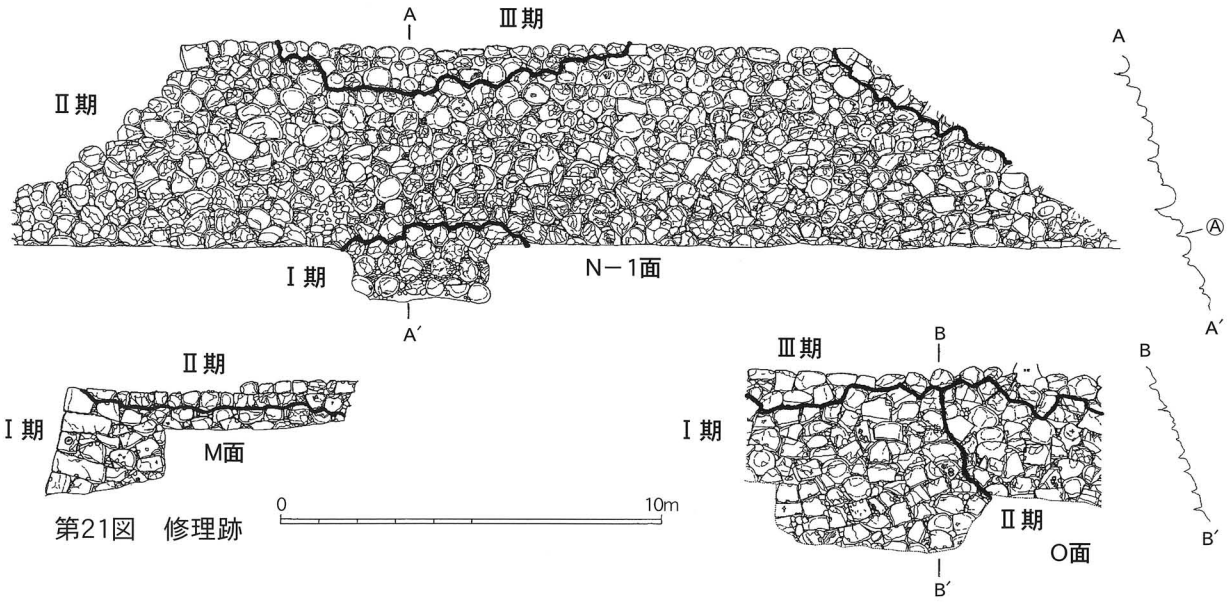


第19図　近代新補石分布図





第20図　刻印分布図



第21図　修理跡

と呼称する。天端面における南北長は29.7mを測る。天端が１段高くなるところの天端上面には、石垣を横断するように一列に石材を並べている。

天明～安政期の富山城図の表現からみると、石垣通路側は櫓台形態でその南側に合坂が表現されている。ただし北側の合坂は搦手虎口通路面端にまで及んでおり、石垣構造上無理のある構造形態となることから、絵図表現の誤りと理解される。

現況における不自然な階段状の積み方などの変形は、昭和29年に開催された富山産業大博覧会のパビリオン建設工事の際に行われた造作とみられる。博覧会時にはこの石垣上に天文台ドームが設置された記録があり、石垣改修時まで望遠鏡の土台とみられる円柱状のコンクリート基礎が残存していた。下から石垣上に上る為の施設を設置する工事で、このような変形が行われた可能性が高い。

主体となるN－１面は、中央部において根石下まで試掘を行った(第３章19－１トレンチの試掘成果参照)。その結果によれば、N－１面は明治32年以前の旧状を残す石積は、根石から３段のみで、それより上はすべて明治32年の大火後の構築である可能性が高いと指摘されている。このことからN－１面の地表露出部のほとんどが近代に積み直されているとみられる。

なお、N－１面の天端北端、N－２・３面の天端の石材は、崩落の危険があるため、平成18年度における石垣修復で新規石材による取替え等積直しを行っているため、測量図と現況は異なっている。

②石　材（第15～17図）　N－１面では対象とした495石のうち、花崗岩が175石で35.3%、安山岩が272石で54.9%、砂岩が３石で0.4%、その他が47石で9.5%である。N－２面では対象とした48石のうち、花崗岩が９石で18.8%、安山岩が27石で56.3%、その他が12石で25%である。N－１・２面を合わせた場合の比率は、花崗岩33.9%、安山岩55.1%、砂岩0.4%、その他10.9%である。以上により、N面における主体的な石材は半数以上を占める安山岩であることがわかる。これは他の石垣面すべてにおいて花崗岩が主体的であることと大きく異なる。

砂岩は高岡氷見産の石灰質粗粒砂岩、通称太田石・岩崎石と呼ばれるものである。その他石材には、凝灰岩・流紋岩・片麻岩があり、流紋岩が多い。産地は常願寺川あるいは神通川とみられる。

試掘確認調査を行って明治32年以前の石積と推定された面には、築石は23石存在している。この内訳は、花崗岩が８石で34.8%、安山岩が12石で52.1%、その他が３石で13.0%となり、やはり安山岩が凌駕している。したがって、N面における安山岩が高い割合で使用されるという傾向は、この面の構築時以来の傾向性を反映していると考えることができよう。

③築石種別（第18図）　N－１面においては、近代新補石29石を除いて、割石82石で17.6%、玉石384石で82.4%で構成される。玉石が８割以上を占める石垣面は他になく、最も多いＪ面（N面北側に隣接する面）において16.0%を占める例があるが、割合は逆転しており、特異であるといえる。

試掘確認調査で明治32年以前の石積と推定された面においては、玉石が95.7%を占め、さらに高い。

④近代新補石（第19図）　N－１面においては、神通川産として流通している大粒の長石粒が顕著な安山岩玉石が、石垣面中～上段に認められる。この石と同一の石材が、石垣面南端において、近代土留工法で作られたハバキ等に使用されている。

このほか天端の１～３段が一部雑多な石材となり、近代新補石である。

⑤刻　印（第20図）　小型刻印が５石にある。割合としては少ない。割石面にみられるのは２石のみである。「—」「Ｖ」「◈」がある。

⑥修　理（第21図）　３期の積直しが推定される。19－１トレンチの調査成果では、根石下部の整地土内から17世紀後半の唐津が出土しており、寛文期の富山藩改修をその上限年代と考えることができる。しかし、第５章５で指摘しているように、明治32年以前の構築であるＩ期は、基本的には幕末

以降とみられる。

Ⅱ期は地表上のほとんどの面である。明治32年以降にほぼ全面的に積み直されている。このことは、N－１面南端における平成17年度石垣改修に伴う調査でも確認されており、観察事実を傍証している。中央下部にコンクリート補修痕があり、この部分の築石が抜け落ちたため補修されたと考えられる。この補修時期は明治32年以降であるが、特定はできない。

Ⅲ期は現代の補修であり、その上限年代を昭和29年の富山産業大博覧会工事においておく。この範囲は近代新補石の分布範囲に一致する。

⑦勾　配（第21図）　19－１トレンチ中央部での石垣勾配は、全体で71度である。Ⅰ期のみみれば69度であり、Ⅱ期以降の勾配に比べごくわずかに緩い。

（３）Ｏ　面

①石垣の年代と石積の特徴　この面は、搦手北石垣の北面で、元来内堀面であったが、現在内堀は埋め立てられ、石垣面は地表から約３ｍの高さが現存する。これらのうちのどの部分が江戸期の石積を残しているのかの判断は十分にできない。これまでの文献記録によれば、この面の東側にある石垣北東隅角部は度々崩れ、幕末期には最終的に修復を行わなかったとされる。また、それ以後昭和29年頃の富山産業大博覧会の工事、昭和30年代の佐藤美術館（現富山市佐藤記念美術館）建設に伴い、大幅に現代的改修が行われたとみられる。現在、この石垣上には佐藤記念美術館の外壁が乗っているが、図示はしていない。

②石　材（第15図）　対象とした127石のうち、花崗岩99石で78.0％、安山岩28石で22.0％である。

③築石種別（第18図）　割石は115石で90.6％を占める。玉石は12石にすぎないが、内11石は安山岩である。

④近代新補石（第19図）　天端から２段目までに安山岩新石などが多用されている。

⑤刻　印（第20図）　小型刻印が11石に認められる。「十」が６石と多く、うち１石は墨書とみられる。ほかに「卍」、「个」と「回」が１組になったものが３石存在する。この組合せはＫ面（富山市教委2007）において４石認められている。この面の３石は、２つの記号の方向が一定しており、Ｋ面にみられる同種の組合せの示す方向とは一致しない。

⑥修　理（第21図）　近代新補石のある天端から２段目まで（Ⅲ期）は、現代の改修で、おそらく佐藤美術館建設時のものであろう。その下はほぼ類似した乱積の石積を示すが、中央右よりの部分に大きな縦目地が存在する。その方向からみて目地右側が改修された可能性があるが、特徴に大きな差異はなく、工程上の問題かもしれない。ここでは仮にⅠ期を目地左面、Ⅱ期を目地右面としておく。なお、Ⅰ・Ⅱ期ともに、石の直上に１石を置き、左右の石にアタリをもたない、いわゆるドン乗せが目立ち、特にⅡ期面には玉石同士でドン乗せを行う不安定なものが存在する。これらの特徴から、この面はＫ・Ｎ面同様、近代に改修された可能性が高いといえる。

⑦勾　配（第21図）　19－３トレンチ西部での石垣勾配は70度である。ただし天端と２段目は、３段目以下より傾斜が緩くなり、Ⅲ期とした近代改修部分に２段目が含まれる可能性がある。　（古川）

第５章　総　　括

１．採土跡と関連する問題

19－１トレンチで検出した採土跡については、土を何の目的に使ったかという問題だけでなく、以下に記すとおり、本丸郭の規模や改修などとかかわってくると考えるため、関連する問題について若干の考察を行う。

採土の時期　採土の年代を具体的に示す出土遺物は少ない。19－１トレンチでは、戦国期のかわらけを多く含む層から17世紀後半の唐津が出土するなど、時代の異なる遺物が盛土中に混入しており、年代の推定が容易でない。したがって、おおよその時期を絞り込むことにする。

16－４トレンチの調査で、採土面の直上層から珠洲が出土し、時期は16世紀前半以前と推定された（富山市教委2006）。今年度の19－１トレンチの調査では、採土面の直下から14世紀後半～15世紀前半のかわらけが出土しており、ひとまず14世紀後半を上限とする。下限は、採土面の上の盛土（１期盛土）中から17世紀後半とみられる唐津の出土があること、同じ盛土中にそれより新しい時期の遺物がないことから、17世紀後半におさまると考えられる。

以上から、採土の時期は14世紀後半～17世紀後半に絞られる。この時期幅の中で、整備や改修の画期から時期区分して、採土がそれぞれの時期だとするならどのような解釈が推定できるかを検討する。時期区分の画期を、中世富山城の成立年代である1543年（久保1983）、前田利長による慶長期の改修（1605年）、前田利次による寛文期の改修（1661年）として、①中世富山城成立前（1542年以前）、②中世富山城期（1543～1604年）、③慶長期～寛文期まで（1605～1660年）、④寛文期以後（1661年以後）の４期に区分する。

①中世富山城の成立前とした場合　この時期の様相は不明瞭であるが、西の丸南部で室町期の遺物・土層が確認されている（加藤・古川2004）。平成19年度に行った本丸東部の土塁下の調査では、刀装具や漆器・陶磁器の出土があり、武家居館の存在が指摘されている（富山市公園緑地課・富山市教委埋文センター2007）。採土が当該期なら、室町時代の居館に伴う造成などが考えられる。

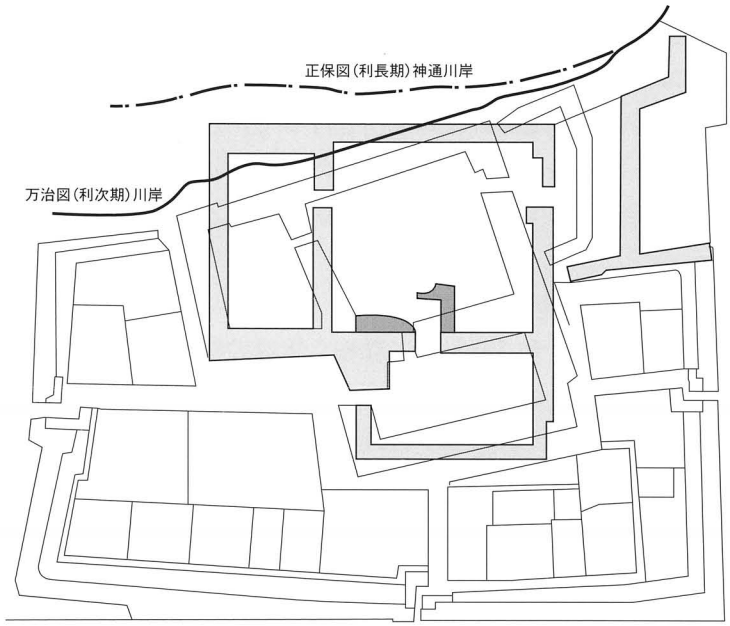
②中世富山城期とした場合　中世富山城の構造は部分的にしか判明していないが、本丸中央で南北に伸びる堀、本丸北部でそれに直交する東西の堀が検出されている（富山市教委2004）。郭を分ける堀と推定され、慶長期以降とは堀の位置や郭構造が大きく異なる。中世富山城の本丸の東限は不明であるが、採土跡があった16－４、19－１トレンチ付近については郭内部であったと推定できる。採土面直上で検出した焼土・炭化物が、郭内部における本丸建物などの火災に由来すると想定できるためである。

採土をこの時期とするなら、中世富山城築城時の造成の可能性が考えられる。あるいは別の解釈として、加藤達行氏が、天正13（1585）年の豊臣秀吉による破却により堀が埋め立てられたことを推定するように（加藤2004）、堀の埋め立てに伴う可能性もある。

③慶長期～寛文期までとした場合　1605年に加賀藩の前田利長が隠居所として富山城の整備を行い、石垣の原型が整う。

採土跡は、本丸搦手南石垣の西面際、現存する石垣のほぼ直下まで及んでいる。採土が行われたのがこの時期であるとするなら、当時の石垣の位置は現在地より東側にあったことが考えられる。古川知明氏は、慶長期と寛文期の内郭の縄張りを絵図で比較し、寛文期に大規模な内郭縄張りの変更があったことを推定した（古川 2006）。石垣については、慶長期の石垣のうち、寛文期以降と大きな位置変更がないのは、本丸・二の丸大手石垣の一部のみで、慶長期の搦手石垣は、寛文期より数十ｍも東

に位置していたとされる（第22図）。また、本丸南辺に残る現存の土塁直下から慶長期の建物遺構・遺物が検出されていることから、土塁は寛文期に現在地に築造されたもので、慶長期にはこの場所は本丸郭内部に入っていたという調査成果もある（富山市教委埋文センター2005、古川前掲）。以上から寛文期に大規模な内郭の改修・規模の縮小がなされたことが推定されている。採土が当該期で、かつ上記の見解によるなら、19－１トレンチ付近は完全に本丸の中に入っていたことになり、採土は本丸郭内でなされた造作であったと理解できる。



第22図　慶長期（アミ）と寛文期の内郭の比較（古川2006）

④寛文期以後とした場合　寛永16（1639）年に成立した富山藩の初代藩主となった前田利次が、万智３（1660）年に城の整備を行った。この場合も③の時期の場合と同様に、石垣の位置が、現在地よりも東側にあったことが推定でき、採土は本丸郭内でなされた行為と理解できる。

小　結　以上の可能性のうち現段階でいずれかに特定はできないが、敢えて一つ挙げるなら②の中世富山城期になされた可能性を考えたい。

上記のいずれの場合も本丸郭内で採土があった可能性が高い。直上に炭化物や焼土が分布し、採土跡が地表面であったと推定されることから、採土の凹凸が、ある時期には露出していたことがわかる。また、採土跡は約20m離れた16－４トレンチと19－１トレンチの両方で検出され、広範囲に及ぶ。このような広範囲に及ぶ凹凸が、整備や改修の結果、本丸内に残されたままになったと考えるより、別の要因で凹凸がそのままの状態で放置されたとする方が理解しやすいように思われる。その要因は豊臣秀吉による天正13（1585）年の富山城破却が第一に考えられる。破却に伴う堀の埋め立てのため採土行為があり、その結果凹凸が残ったという想定である。ここで想定していない別の可能性も当然考えられ、憶測の域を出ないが、今後の調査成果により再考を期したい。　（野垣）

２．19－１トレンチの盛土と石垣

上記の採土跡の上には、約1.2mにわたって固くしまった土層が堆積し、人為的な盛土がなされたと推測される。第３章では少なくとも２時期に盛土があった可能性を指摘した。これは、盛土上面に分布した焼土・炭化物や鉄分の沈着から火災や被水があったことを想定し、そこがある時期の地表面になっていたという想定による。したがって、２回というのは最低限の数字である。１期として一括した盛土も、複数の時期にわたっていた可能性や、盛土後に上部が削平されている可能性などが考えられるためである。こうした問題があることを前提に盛土と石垣の関係を検討する。

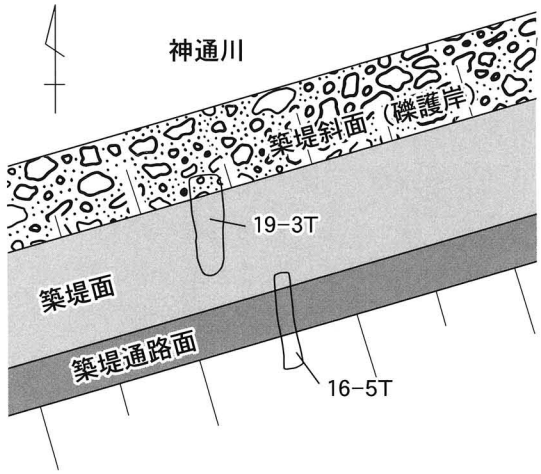
１期盛土中（24～32層）の30層直上から17世紀後半の唐津が出土した。したがって、１期盛土上面はそれ以降の地表面である。その後の２期盛土（12～23層）と２期盛土を掘り込んで据えられている石垣の設置は、さらに新しい時期となる。２期盛土の中間には、水平に堆積したしまりのある15層が

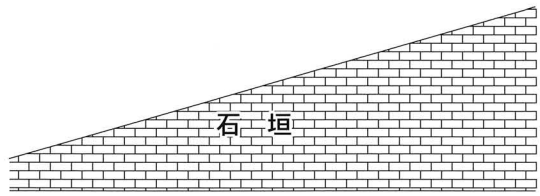
あり、これを境にさらに２期に細分できるかもしれない。17世紀後半以降で石垣改修時期の候補をあげれば、記録がある寛政３（1791）年の改修、安政５（1858）年の飛越地震後の改修などがある。いずれの場合も本地点が改修箇所となっていたかは不明であるが、後者の場合は本地点の石垣が玉石積みであることから崩落しやすかったとみられる。また、本章５で指摘しているように石積の特徴からも幕末期以降の年代を考えることができる。（野垣）

３．築堤について

19－３トレンチで明らかになった築堤の構築状況から、規模・構造を検討する。

今回の調査で、江戸期から近代まで少なくとも３期分の築堤盛土が残ることが推定された。下部ほど古い時期の築堤盛土を残している。３期の築堤は、神通川に落ち込む斜面が確認された。時期は近代と推定されるが、幕末期まで遡る可能性もある。斜面には川原石が葺かれて護岸されている。巻頭に掲載した絵図には、神通川側の斜面に礫の表現があり、発掘調査の成果と一致している。



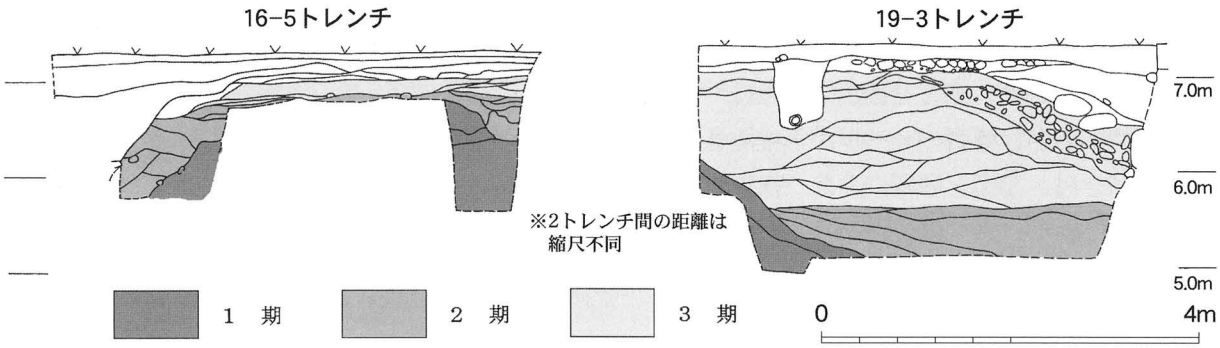


第23図　幕末～近代の19－３トレンチ付近の築堤模式図(1:500)

築堤の規模　平成16年度調査の16－5トレンチでは、堀の落ち込み肩が確認されている（富山市教委2006）。今回の調査成果と合わせると築堤のおおよその幅が把握できる。16－５トレンチの堀の落ち込み肩は時期によって多少前後し、３期分確認されている。そのうち幕末期とみられる３期の落ち込みと、今回検出した神通川への落ち込みから規模を復元してみる。第23図はトレンチ付近の築堤と堀の模式図である。これによると築堤の上端幅は約9.5mとなる。絵図では、神通川側への落ち込みラインは緩やかに波打っており、築堤幅は場所によって一定でないことがわかる。絵図と比べると、発掘調査で推定された築堤は、堀幅との比率でみるとやや幅が狭い。これは、上述した16－５トレンチと19－３トレンチで基準とした落ち込みに時期差がある可能性や、絵図には描かれない時期の築堤幅を示している可能性などが考えられる。

築堤の構造　19－３トレンチの調査では、築堤を築く基底面となった礫層まで検出した。礫層は北（神通川側）に向かって緩やかに下がる。築堤は礫層の上に盛土して築いているが、第３章３で指摘したとおり、盛土は３層に大別でき、時期の違いを示すと考えられる。以下、下層から１～３期に分けて述べる。

最下層の１期盛土は、シルトと砂礫土からなる。上層が砂質土からなるのに比べ異質である。盛土方法も傾斜をもたせた積み方で上層と違いがある。その上の２期盛土は、黄色系土と灰色系土を交互にやや傾斜させて盛っている。異なる土を交互に積む方法は、築堤をより強固にするための造作と考えられる。３期盛土は、細かい単位で北から南に向かって盛土している。以上のうち２期と３期の盛土は砂質土が用いられている。特に３期は、混入物の少ない均質な砂質土である。盛土の土砂は、神通川べりの堆積砂が使われたのではないだろうか。手近にあったため利用しやすかったものと考えら



第24図　築提の盛土変遷

れる。

複数回にわたる盛土は、神通川の氾濫によって築堤が度々決壊したためであろう。氾濫によって築堤土砂が流出する度に、上部に盛土し直したと考えられる。

16－５トレンチの築堤盛土との対応　19－３トレンチの南東に位置する16－５トレンチでも３期分の築堤が確認されている（富山市教委2006）。いずれのトレンチも１期盛土は砂礫層の盛土という点で共通し、また16－５トレンチの３期盛土は、幕末期と推定されることから、19－３トレンチの３期盛土の時期に近い。これらをもとに両トレンチの盛土の対応を示したのが第24図である。トレンチは連続していないため厳密な対応関係は不明であり、時期の違いによるおおよそを示したものである。１・２期盛土とも19－３トレンチの残存レベルが低いのは、神通川側であることにより氾濫の影響を受けやすかったためではないか。

各盛土の時期　神通川斜面の護岸を行ったとみられる３期盛土は、出土遺物から近代と推定できる。慶応末年頃の絵図に護岸の表現があることから、幕末期まで遡るかもしれない。１・２期盛土は良好な出土遺物がなかった。16－５トレンチの１期盛土中からは戦国期のかわらけ・板石塔婆等の出土があり、１期盛土が慶長期富山城の時期に伴うことが推定されている（富山市教委2006）。しかし、前掲した慶長期の縄張り（第22図・古川2006）にしたがうならば、当時の築堤は本地点より北にあったことになり、１期の築堤が慶長期とは認めにくい。したがって、出土したかわらけや板石塔婆は上限を示すもので、実際の盛土時期は寛文期以降となる可能性がある。２期の盛土については江戸期のなかで理解できる。（野垣）

４．水路について

19－４トレンチにおいて、幕末期～明治期の水路とみられる遺構の一部を検出した。ここではこの水路について検討する。

水路の根拠　まず、これを幕末期～明治期の水路と考えた根拠について述べておく。

①巻頭カラー図版に掲載した絵図「越中国城主前田利同城囲の図」によると、水路の位置が本トレンチの場所と一致する。

②水路の上の土層から出土した瓦のうち、A類とした第11図23～27の一群は、嘉永２（1849）年に築かれた千歳御門の瓦と胎土・釉薬がよく似ている。千歳御門の瓦は、平瓦で厚みも若干異なり同一ではないが、比較的近い時期を示すと考えられる。したがって、時期も大きく矛盾しない。

③水路の護岸とみられる敷石は、西に下がっており、南北に延びる水路の東斜面と考えられる。検出した当初は、築堤の護岸ではないかと考えたが、その場合、築堤の斜面方向とは合致しない。

④絵図と対照すると、水路は正確に南北に延びるのではなく、やや北西—南東方向に傾いている。調査で検出したのは一部分であるが、傾斜のレベルから推測される傾きは、絵図と同様の北西—南東方向を示す。

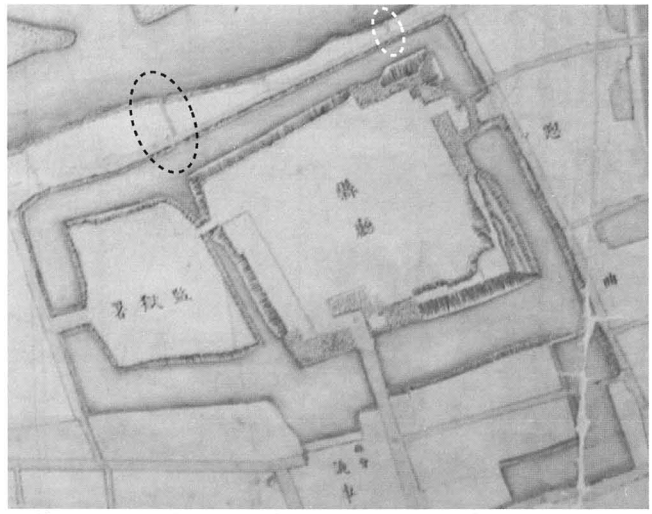
以上のことから、今回検出した敷石遺構を絵図に描かれた水路跡と推定した。

規　模　絵図と現在の地図の縮尺を合わせ、誤差も考慮すると、水路の規模は幅２～３m、長さ25～30m程度と推測される。

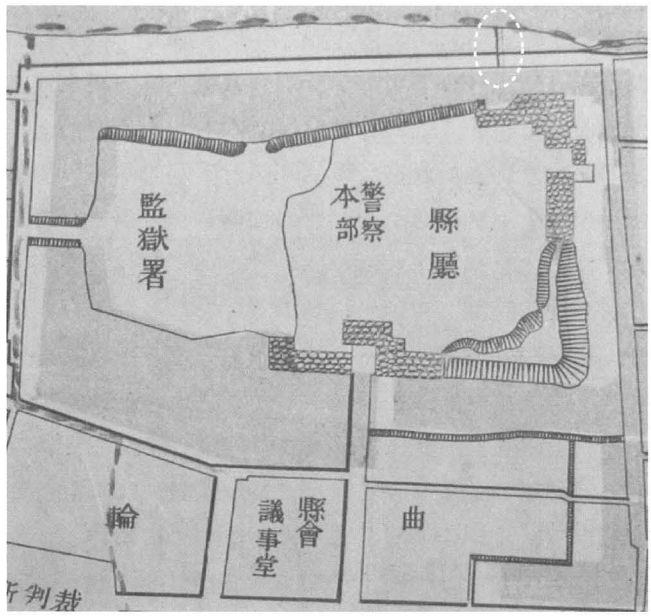
利用法　水路の水は基本的に内堀から神通川に流れる構造であったと考えられる。調査範囲が狭いので高低差を見極めることは難しいが、度々増水・氾濫する神通川から水が入ってくる構造にしていたとは考えにくい。内堀は約５間間隔で水が自噴していたという戦前の記録（八尾ほか1977）がある。これに降雨などが加わって内堀の水位が一定量を越えたときに排水するための水路と推定できる。神通川と内堀の間を舟などが往来するという用途については、幅２～３mと推定される規模から判断して考えにくい。

存続期間　水路の描写が最初にみられるのは、巻頭カラーに掲載した絵図である。これより古い絵図にはみられないので、上限は1860年前後であろう。下限については、明治26年の富山市街実測図に同じ位置に水路とみられるものが描かれている（第25図黒点線部）。しかし、これ以降の市街図では認められない。省略された可能性もあるが、現時点では少なくとも明治26年までは存在していたと考えたい。

水路の付替え　明治25年の富山市実測図は、上述の水路のある場所から東側の位置（本丸北東側の築堤）に水路状のものが描かれている（第26図白点線部）。こうした視点で前掲の明治26年の市街図をみてみると、やや不明瞭だが、やはり同じ位置に神通川と内堀をつなぐ薄いラインがみえる（第25図白点線部）。明



第25図　明治26年の富山市街実測図（部分）
（富山市郷土博物館蔵）



第26図　明治25年の富山市実測図（部分）
（富山市郷土博物館蔵）

第27図　明治40年頃の内堀と築堤（富山市郷土博物館蔵）

治26年の図（第25図）には、東西に水路があるから、明治25年の図も同様に描かれていてもよいはずだが、西の水路はみられない。省略されたのか、一時的に廃絶していたのであろうか。

第27図は内堀の北東角から西方向を撮影した明治40年頃の写真である。中央が内堀、右手に樹木が植わっているところが築堤である。築堤部の写真やや下寄りの位置に杭状のものを打ち込んだ施設がみえる。これが明治25・26年の図にみられた東側の水路と考えられる。写真ではこの上に通路がみえることから、開削状態ではなく、地下を水が流れる構造であったと推定される。杭状のものは水量を調整するための水門のような施設かもしれない。

以上から、明治20年代半ば頃に本丸北東側の築堤に新たな水路がつくられたと考える。一時期は東西の水路が併存していたと考えられる。付替えの理由は不明であるが、明治32年の大火後に行われた城の造成・修復の一環であった可能性などが考えられる。（野垣）

5．N面石垣の測量調査の成果

平成18年度までの石垣測量の成果概要は、昨年度の報告書（富山市教委2007）で報告したところである。ここでは、今年度の石垣測量の成果に基づく新知見や修正点に絞って考察を行うものとする。

測量調査によりN面は他の石垣面と性格を大きく異にすることが明らかとなった。第１点は玉石の割合が極めて多いこと、第２点は安山岩を多用することである。

玉石を多用した石垣築造は安定性を欠き、高石垣の構築、急勾配の石積みは一般的に困難とされている。N面では、整形した角石の勾配に近い70度の急勾配で積まれ、また乱積としているにもかかわらず、１石の真上に置く不安定ないわゆる「ドン乗せ」を行っている箇所が随所に認められることからも、安定性を欠く要因を加増しているといえる。明治32年以前のＩ期石積部分は、特徴として①すべて玉石使用であること、②落し積風の布積であること、③70度の急勾配を持つこと、の３点が挙げられる。自然石野面積として理解すれば急勾配であること、基本的には落し積であるが根石上の築石にはドン乗せを行っている部分も存在することからみて、伝統的な石垣石積とは解し難く、現在のところ幕末以降の年代を与えるのが妥当とみられる。

一方、玉石石材には表面に小形刻印や記号墨書が存在し、丁場における選択目印刻印と理解される。この小型刻印等は慶長後期のものとみられることから、玉石のうち多くのものが慶長後期に調達されたものであることが分かる。

玉石の規格は割石築石とほぼ近似している。玉石を２分割すると築石としては小さくなりすぎることから、当初から「分割しない築石」として一定数量が調達されたものと考えられる。富山城現存石垣においては、N面以外にもわずかではあるが玉石築石の使用が認められており、それはN面の属する搦手南石垣に集中している。比較的密度が高いＪ面では、上部の改修部分に集中しており、江戸後期以降の改修に伴う新補石として新規調達されたものが多いとみられる。K面にはN面と共通する玉石が散見される。鉄門石垣においてはわずか数石である。このことから、特に搦手石垣構築において玉石が多用されており、かつ本丸郭面に面するN面において使用頻度が高い傾向にある。

慶長期に富山城石垣築造に携わったとみられる金沢穴生が、本拠地である金沢城において同時期に築造した石垣（金沢城石垣編年２期）においては、基本的に不安定な玉石あるいは玉石形状の石材使用は認められない。これは調達石材産地の違いによる獲得石材の形状の差異が最大の要因であろうが、未加工石材であっても割石に近似した形状の石材を選択する傾向がみられ、富山城がアタリの少ない長円球状の玉石を多く調達している状況とは大きく異なるといえる。

しかしこれらの玉石は、その規格が割石石材と近似することを以って、石垣築石として使用された

とは必ずしも言えない。城郭石垣以外にも土橋部分などの低い石垣や、端取り石、庭園石材への利用など、用途は多様である。撤去や加工されたであろうものを含めると、玉石は相当数に上ると推定されることから、ある一定の目的で集められたことは確かであろう。仮に石垣石材として使用し、石垣強度をそれほど弱めずに玉石を使おうとすれば、割石の間に玉石を挟む方法により安定性を確保することが可能となるが、その場合搦手南石垣だけを対象とすれば数量が多すぎるとみられる。

富山藩政期においてN面は、本丸一杯に建てられた本丸御殿の裏手に当たり、建物と近接していた。この状況からみて、鉄門石垣のような見ることを意識する石垣を築造する必要はなく、築石として不良な余剰石材としての玉石を、石垣築石として見えにくい所に積極的に再利用したとする理解も可能である。

いずれにせよ、慶長期にこれらの玉石が大量に獲得され、富山藩初期の改修期には慶長期石垣をいったん解体し再築造した際に、玉石を搦手石垣に集めて積み直されたと理解される。この現象は、慶長期搦手石垣周辺に玉石を多用した石垣面あるいはその他の構築物が存在し、その状況が再利用の際に影響を及ぼしたため生じたものと推測しておきたい。（古川）

引用・参考文献

家田淳一 2000「陶器の編年」『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

加藤達行 2004「富山城の破却について」『富山市の遺跡物語』No.5 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

加藤達行・古川知明 2004「中世富山城の考古学的調査に基づく考察」『富山史壇』第142・143合併号 越中史壇会

金森久一 1935『富山城の起源』

久保尚文 1983『越中中世史の研究 室町・戦国時代』 桂書房

斉藤朝子・高尾由美子・内山久子 1996「富山城址採集の瓦について」『富山市考古資料館紀要』第15号 富山市考古資料館

佐伯哲也 1992「神保氏の重要拠点(2)」『越中の中世城郭』第2号 富山の城を考える会

佐伯哲也 2004「中世富山城について」『富山城跡試掘確認調査報告書』 富山市教育委員会

高岡 徹 1980「富山城」『日本城郭体系』7 新人物往来社

高岡 徹 1981「城館研究の視点(2)」『富山史壇』77号 越中史壇会

高岡 徹 1987「第三節 神保氏再興と富山築城」『富山市史 通史上巻』

高瀬 保 1992「私と近世富山町・富山城」『富山市考古資料館報』No.23

坪井利弘 1976『日本の瓦屋根』 理工学社

富山市教育委員会 1989『特別展 富山藩の文化と産業展』

富山市教育委員会 2004『富山城跡試掘確認調査報告書』

富山市教育委員会 2006『富山城跡試掘確認調査報告書』

富山市教育委員会 2007『富山城跡試掘確認調査報告書』

富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2005『富山城跡現地説明会資料』

富山市郷土博物館 1999『富山城の歴史展』

富山市郷土博物館 2000『富山の近代化～街はこうしてつくられた～』

富山市郷土博物館 2005『富山城ものがたり』

富山市公園緑地課・富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2007『富山城跡現地説明会資料』

富山市史編集委員会 1960『富山市史』第一巻

西井龍儀 2001「富山県産瓦の変遷」『北陸の瓦の歩み』社団法人日本セラミックス協会北陸支部

林寺厳州 1992「富山城跡採集遺物について」『富山市考古資料館報』No.23 富山市考古資料館

深井甚三 1995「要害に囲まれた富山城下」『太陽コレクション城下町古地図散歩1金沢・北陸の城下町』平凡社

古川知明 2005「中近世富山城研究の現状と課題」『富山史壇』第147号 越中史壇会

古川知明 2006「慶長期富山城と城下町構造」『富山史壇』第150号 越中史壇会

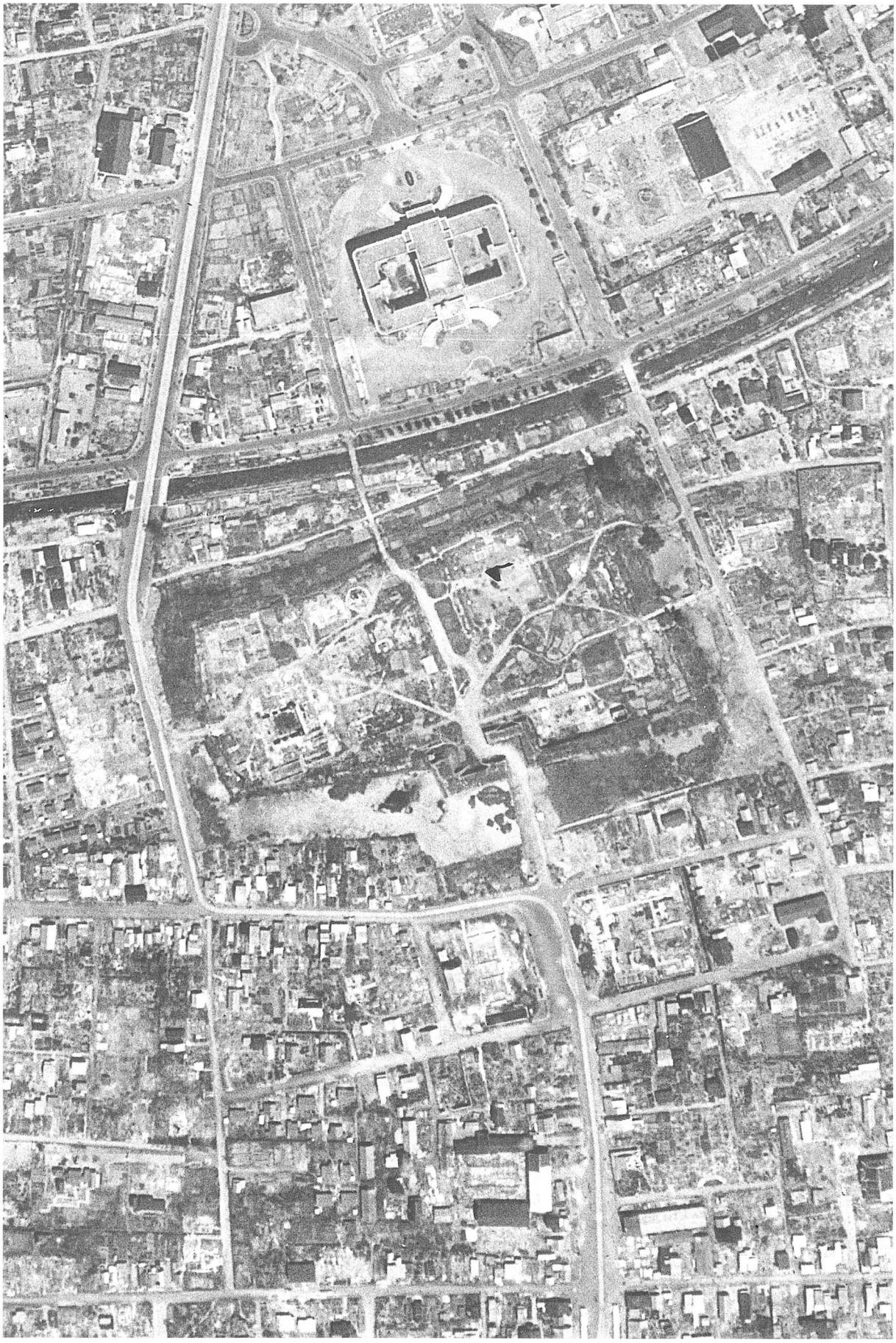
宮田進一 1997「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房

森 隆 2003「富山県の中世土器（資料編）」『富山考古学研究』第6号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

八尾正治・水間直二・山岸曙光 1977『総曲輪懐古館』 巧玄出版

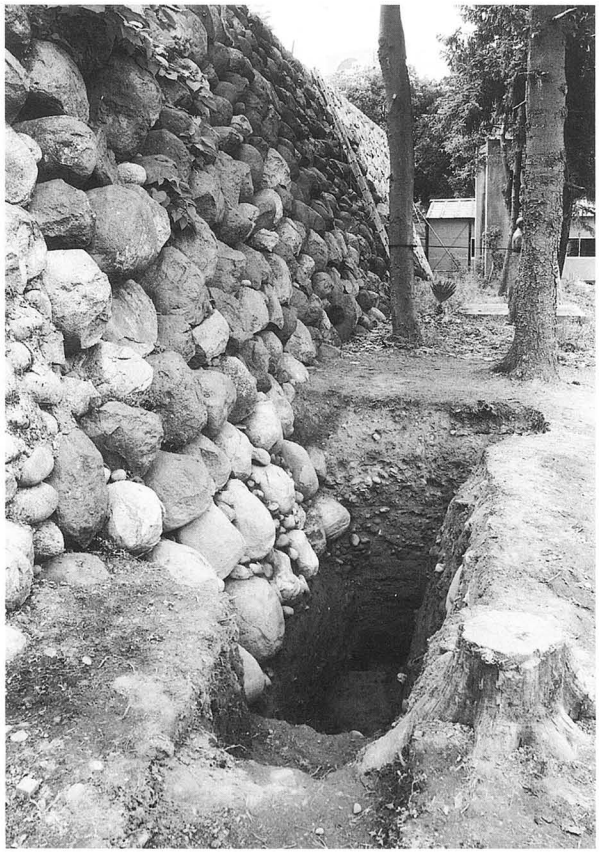
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

図版1　空中写真



富山城周辺の空中写真（1946年米軍撮影　M203-A-7）

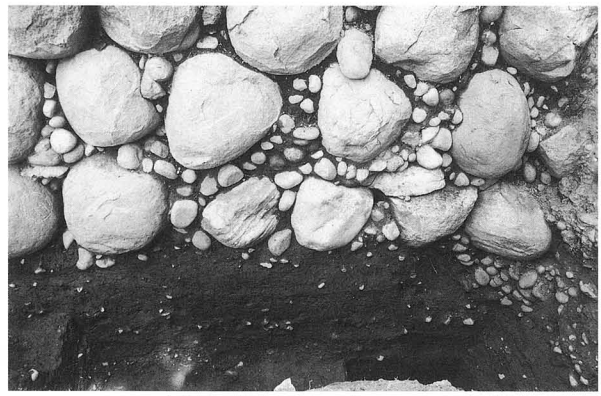
図版2　19-1トレンチ



19-1T 全景（北から）

19-1T 南壁土層断面（北から）

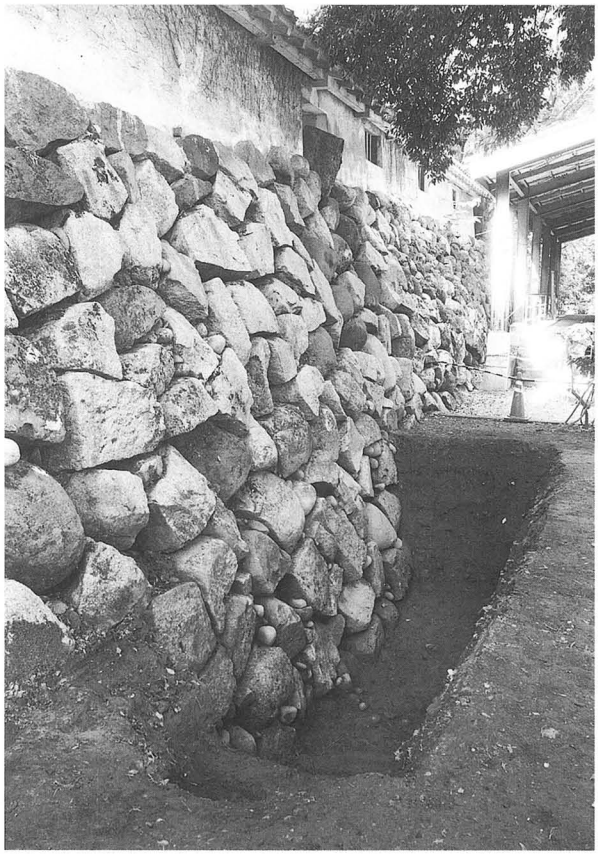
19-1T 採土跡（南から）



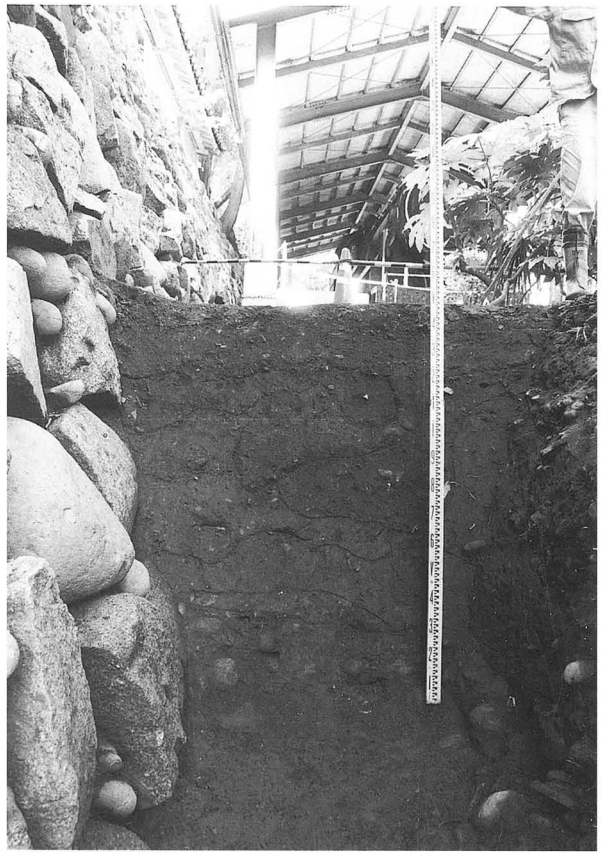
19-1T 東壁土層断面（西から）

19-1T　S P01（南から）

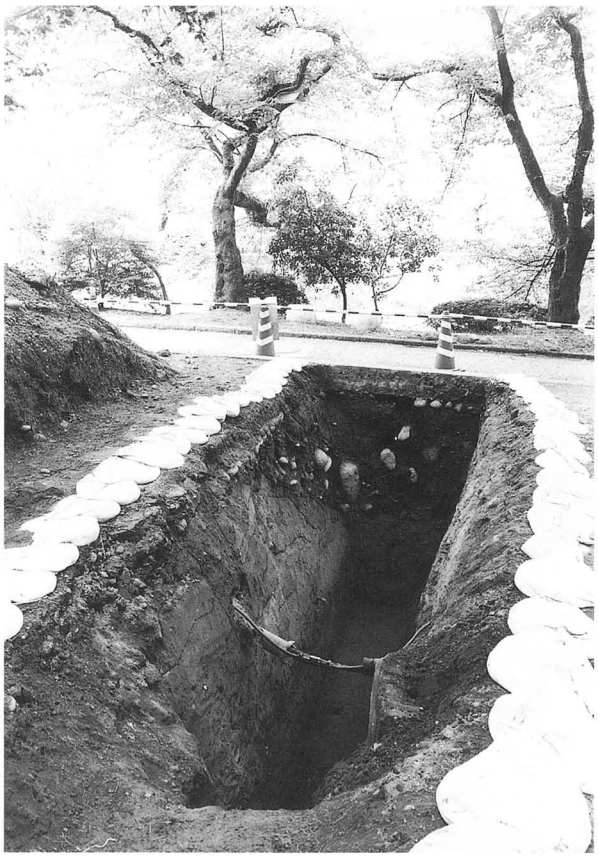
図版3　19-2・19-3トレンチ



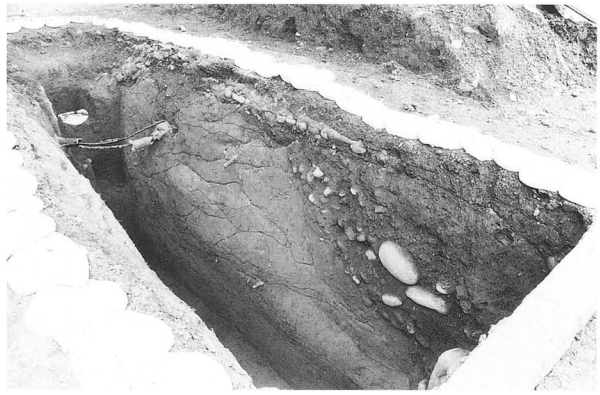
19-2T 全景（北東から）



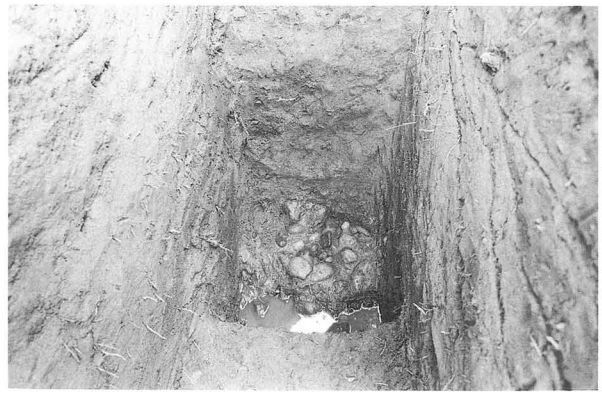
19-2T 西壁土層断面（東から）



19-3T 全景（南から）



19-3T 西壁土層断面（北東から）

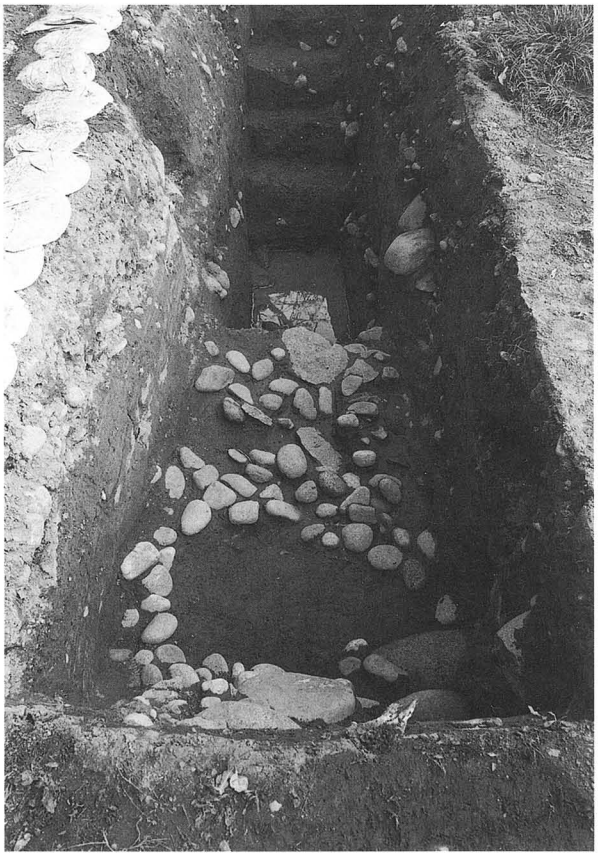


19-3T 基盤礫層検出状況（北から）

図版4　19-4トレンチ

19-4T 下層敷石(水路跡)全景（南東から）

19-4T 下層敷石(水路跡)検出状況（南から）



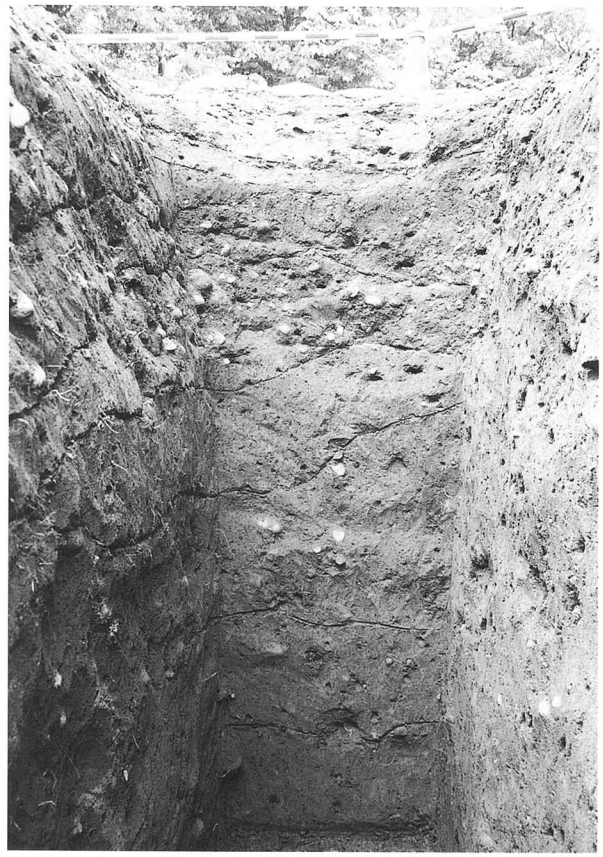
19-4T 中層敷石検出状況（北から）

19-4T 東壁土層断面（北西から）

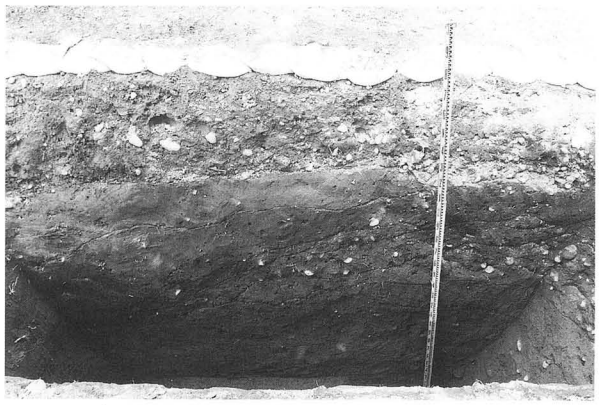
19-4T 瓦出土状況(中層敷石直下)（東から）

図版5　19-5トレンチ

19-5T 全景（北から）



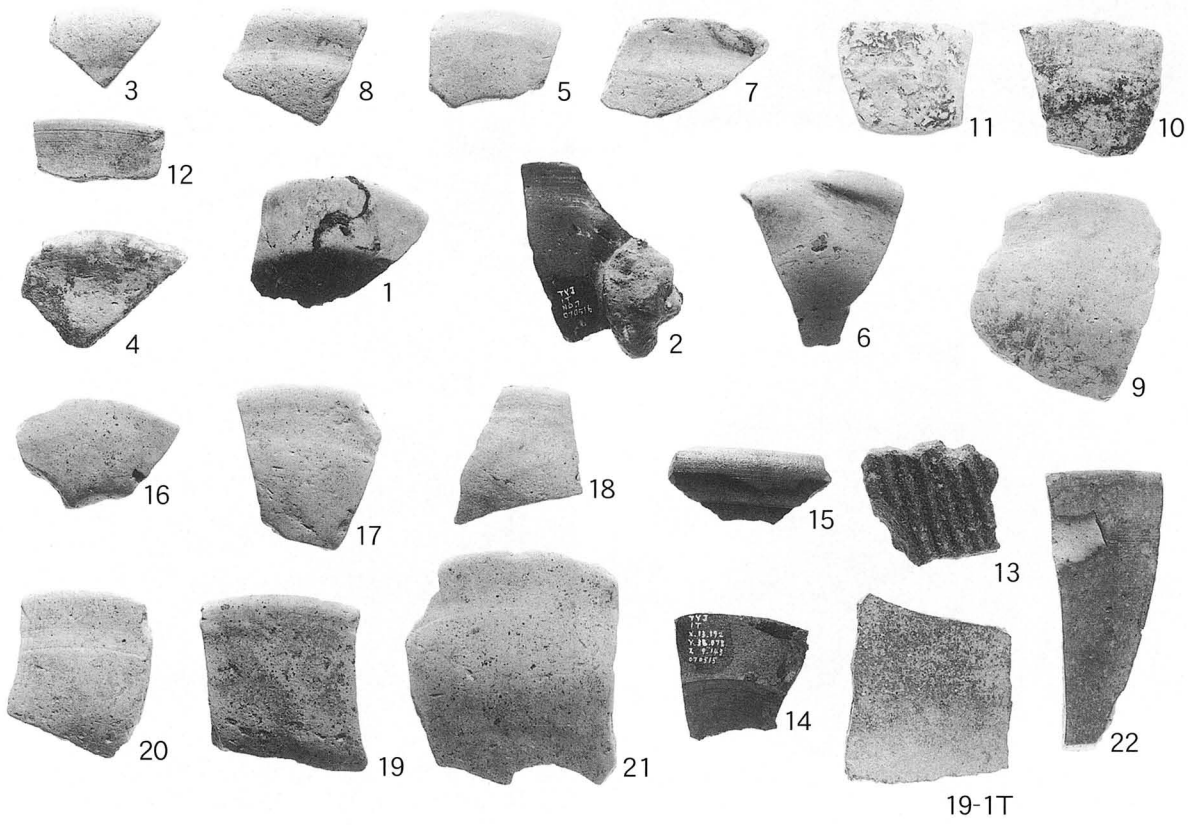
19-5T 南壁土層断面（北から）



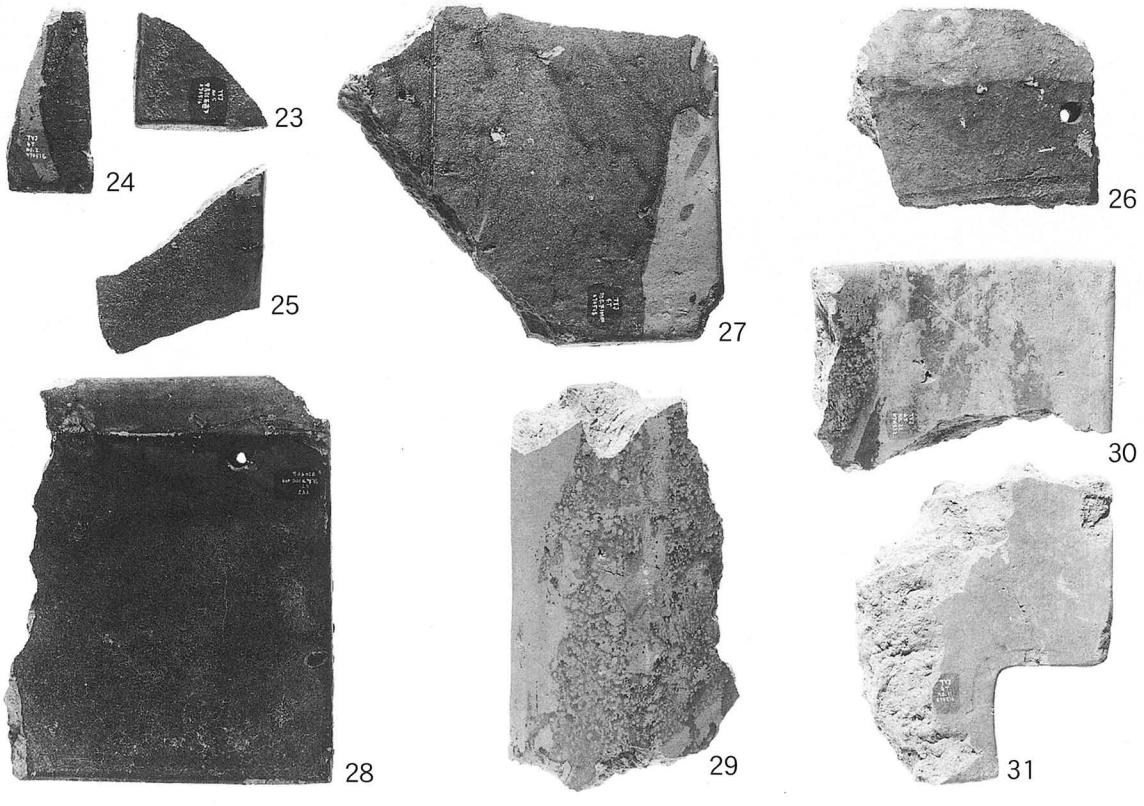
19-5T 東壁土層断面（西から）

19-5T 調査前（南東から）奥が松川

図版6　出土遺物

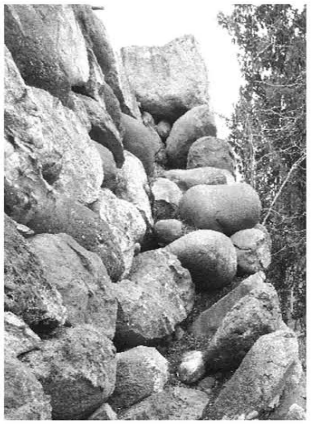


出土土器・陶磁器

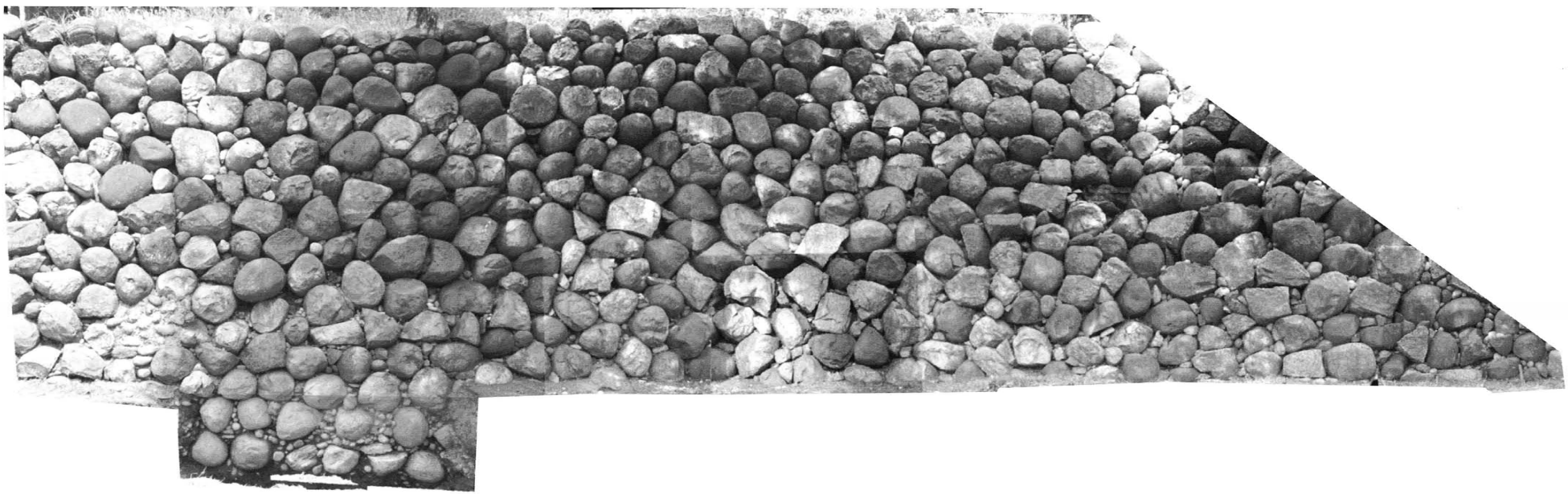


出土瓦

本丸搦手南石垣　西面（N-1面北側・N-2面）



本丸搦手南石垣　南合坂面（N-3面）

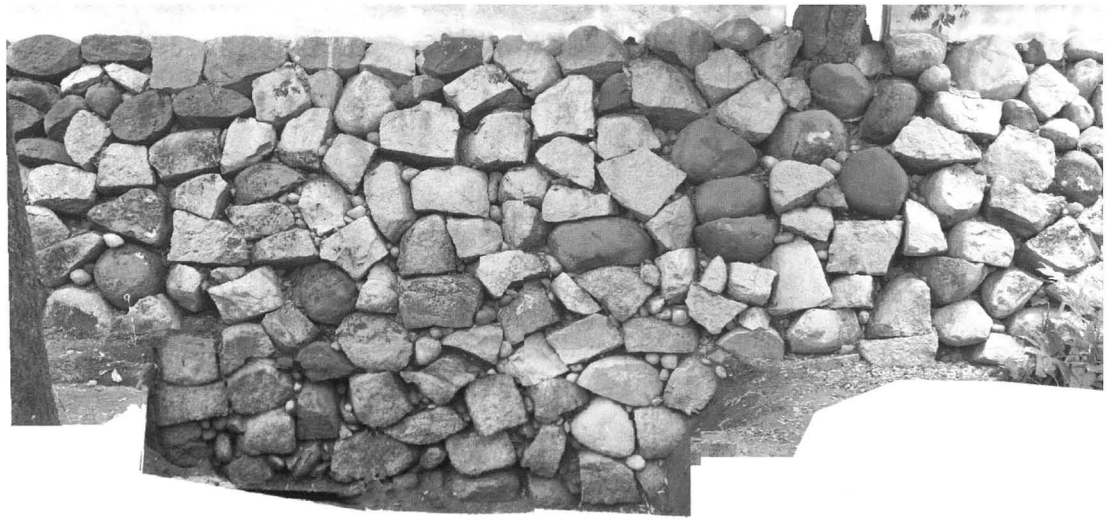


本丸搦手南石垣　西面（N-1面　南側）

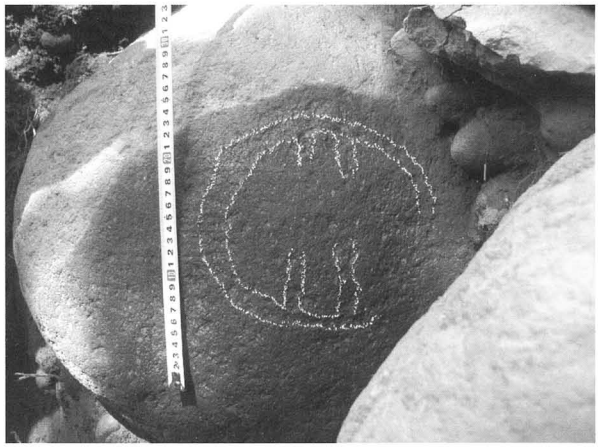
図版7　石垣①

図版8　石垣②

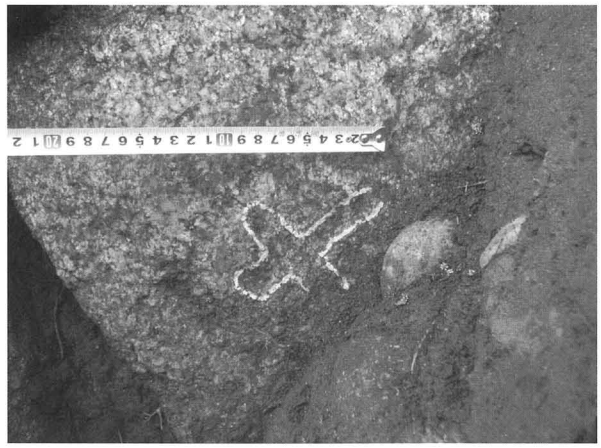
本丸搦手外枡型虎口　北面（M-2面）



本丸搦手北石垣　北面（O面）



本丸搦手南石垣西面（N-1面）刻印



本丸搦手北石垣北面（O面）刻印

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とやまじょうあとしくつかくにんちょうさほうこくしょ
書 名	富山城跡試掘確認調査報告書
副 書 名	
シ リ ー ズ 名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	24
編 著 者 名	野垣好史、古川知明
編集・発行機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
所 在 地	〒930-0091　富山市愛宕町一丁目２番24号　　TEL 076-442-4246
発 行 年 月 日	西暦2008年３月18日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
富山城跡（とやましじょうあと）	富山市本丸（とやましほんまる）	16201	201397	36度 41分 35秒	137度 12分 40秒	20070507 ～ 20070627	50	富山城址 公園整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富山城跡	城　跡	中世	ピット	かわらけ、珠洲、八尾	
		近世	採土跡、築堤	唐津	採土跡を検出した。３期の築堤の盛土を確認した。
		幕末～明治	築堤、水路、石垣	瓦、陶磁器	絵図に描かれた水路を検出した。

要　約

本丸北東部の搦手南石垣西面際の調査（19-１トレンチ）では、採土跡を確認した。その後、少なくとも２回の盛土造成がなされていることが考えられた。また、この地点の石垣は、明治32年の大火以前に根石から積み直されていることが推定された。積み直しの時期は幕末期以降とみられるが、この時期の痕跡が残るのは根石から３段目程度までで、それより上部は明治32年以降に再度積み直されている。

内堀と神通川の間に存在した築堤の調査（19-３トレンチ）では、江戸期～近代まで３期の築堤の盛土が確認された。近代の築堤は、旧神通川に落ち込む斜面が礫で護岸されていることがわかった。また、本丸北西側の築堤で幕末期～明治前半頃に存在した水路跡を検出した（19－４トレンチ）。内堀と旧神通川をつないで、堀の水を排水する目的があったと考えられる。この水路は当時の絵図にも描かれている。また明治20年代半ばには別の場所に付け替えられた可能性が考えられた。

石垣の測量調査では、搦手南石垣西面は慶長後期に調達された玉石を多用し、他の石垣面とは大きく様相を異にすることがわかった。これは、慶長期の搦手石垣周辺に玉石を多用した石垣面あるいはその他の構築物が存在し、それが再利用の際に影響を及ぼしたため生じたものと推測された。

富山市埋蔵文化財調査報告24

富山城跡試掘確認調査報告書

2008年３月18日発行

発　行　　富山市教育委員会

編　集　　富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒930-0091　富山市愛宕町一丁目2番24号

TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810

印　刷　　大栄印刷株式会社